

諧而形集

二

卷七 人事	卷六 人倫	卷五 釋教	卷四 神祇	發句
----------	----------	----------	----------	----

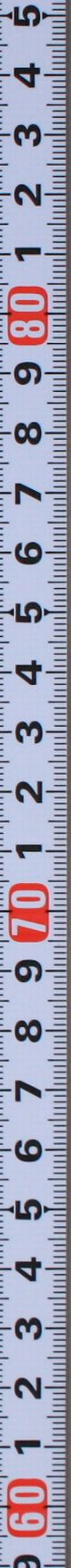
二

中村俊定文庫

文庫 18

482

2







俳諧而形集卷之四

東都 解庵 皐月平砂 著



發句

神祇門

神明宮

初日 切 高天原乃 カ 芝印 奉稱 大日 禰貴

雞や 柏より 芝二合せ 奉納 神明宮 飯

六乃 根や 神の 市草 秋 神明宮 納橋場神

葎 葎や 六石 堀江の 文桂 奉納 神明宮 深川六

木 禰肩の 旁も 上 神 禰 堂

平夕川行 形集卷四 神祇一 三少歳



後よたいと毎島ん朝の霧奉納八町  
暑き日をららして思へ神乃恩奉納日暮  
夜ろろ今さ守神のひりり奉納

夏山やひろくとも里日の神慮同上

神垣の菊やろくや亭座敷同上

きよふろくや鏡又かき糸花の天同上

短長やう門せを伊勢も一跨き同上

以き涼め庭の面へぬけまわり同上

八幡宮

名月やむりやろくく目釘竹男奉納山

未なりき神乃高弓や春袋寄袋  
旭の来てゆ〜記神の鴨御奉納  
内川小雪ちきさや武州金沢寄袋  
出来秋を地乃よ紫や神の馬奉納  
露志らて立を勤めや神奉納  
棚敷や弓矢の神を楯又咲奉納  
茂みろく八弦字いくつ塘の彩同上  
宮近き饅の名にや樺山同上  
かき橋下ふむや神奉納  
隅をさし摩利支天河名橋奉納

平夕川下 万形集卷四 神祇二 三少歳







傘の柄又地虫さそふや氏子とそ

香取社

羽旁やあゝ色かゞりの海鏡子元文丁巳  
孤雀汀主人以名月篇納行徳香取社令予

諏訪社

野狐や温泉よ一まハア源方の志奉納信  
苗代や神代のは乃ゆつアもの越後柴

肉徑と打ものぢくや翠簾まの三十日也

望月燕波之家毎歳祀之自謂不知其故

白髭社

湖の霧乃や神乃懸鏡奉納江州打嵐社

神や志教つゝひく蟬のりも信州寄蟬。

伊豆権現

石切小神をひきや伊豆の秋

常州大社第三宮祭神日

野蒜まて味方の節や神社進水府朝比奈氏之需奉納之

吾孀明神社

美桑より朽りひまほん神乃片は葉寄若

浅草三社権現

あゝ會の神又むらゝせ宮戸川















吹雪の風小冬有長谷川町三光社  
 春宵一の燈を付木より寄住吉町社硫黄社  
 きらひとふあ記め加あれ貝杓子稻荷堀社  
 少一ねめ社社も嫁入橋辨慶の丸

笠七福之社者。在湯島管祠前石橋邊旭亭  
 平沙之別業。造營新成時寄員如左

石橋の角尔以く秋神乃珠  
 第目尔人ふりかろく神の稻目白  
 末く冬神乃高となる田植寄田植○四  
 社子出へ御里丈や美葉陰狐松社寄調寄若葉末

笠あてに神を宿きや松の勢笠松社又門日  
稻荷在大師河原之

北○砂江奉納之  
 氏神尔遠て冬の内守総社半

神事サカの茨かこひぬわせ赤小豆野洲那

初稻や神の次根を一かろけ羽洲大

交りよかれ早苗の塵をぬ寄早

天満宮

紀行を梅尺あうらや神杉み北奉納

飛御尔ハ鞞もぬさちり初紅葉奉納紫

さあつたのみちあきりひくまたるヤたるよ天つ











春をさす役おなりたり神乃梅  
 とし毒や竹乃公のきゆ歌うる竹寄  
 飛梅やあううう後乃歌内のみ  
 花梅乃枝ふりかへふ雲路華  
 ずめりや注連又厚うう歌松の役  
 一杖とハ今も習ふ能松の色  
 二もと受心管不立うう竹枯秋  
 神乃詩を撰てあう屋よ松の蟬  
 唐手洗や降こきとくも梅乃何め  
 とそお押を梅奉納の車みち

廻廊外物よめとくや梅乃窓

狛犬と眉をひくくやむめ松

神松やあう後乃まうに光乃ひ枝

若松や秋の志新く改祢宜の倉

寶曆二年壬申二月二十五日正當

八百五十年御忌

梅老沼有明月緒神之友

拔鋒大明神上州一宮也

清和のおちの時みえおにすたまおも神威を仰きまうて

貞観の雪妙う積や初尾錢松井淳考五料文車所考



鹽竈明神祭禮正月二十一日四月

六條をうつせやふ賀乃神祭所起月請

塩うめやまほり乃にあむ勢揃

矢口社

十分の利を奉致さるるうれ

栗田大明神在紀州海部郡名曰

あにきく孤山まじらちの名を田新あり海を

後めて候海河元ゆくとちり致系きて致すに

やすし控神宮によきしなりて成ぬ

於なるに千島泊傳や下の宮産其郷人々之需

石鉄山

伊豫のさねとさくらちりき縁起をきくすきく

一胞四面乃國形なりたよりき

峰きりく才花や愛娘乃髪か古事記曰

之ニ名島此島者身一而有四面四

雉子宮

御園よりけむを花の袖々さ記

秋葉大権現

下園や社の狗みふ阿武勝福

船玉社



きよむへし玉の神の名藻の糸末稻荷堀

龍神社

波よけや龍宮城の花子垣羽田社 秋

金比羅

夏艸の園産をかろし新社目黒鎮護社 鳳林山

非乃名於金包むや牝子畑京極君邸中 社 寄 牡丹

茂林対象の造りや神の木

貴宮大明神在豆州 真名窟

通夜乃爰あけの予や雲此鐘享保七年 壬寅五味

予圓方本國神社之故奉納區額時

産土神

うふきふ乃灯を流るひより初饗

○神祇總類

うとひ寸よ月日おさめを神木

秋乃実を於又なりより夏やし乃

夜の契ハ批抄法柄なり神夜

七夕やおなすしを并又鞠の神起清

け百へと後百のひこむや交もみち

逆鋒のあと清めりすくちらひ

務農又能も友寐や神の告題席山 夢想



其の長や一字子令非姑告題雀見砂  
精進の遙きみの明夢想宮保氏之祖  
常久居士百年祭祀  
かあ〜のそ花をたうへぬ極極元王言牛

俳諧而形集卷之四終

俳諧而形集卷之五

東都 解庵 皐月平砂 著

發句

釋教門

釋迦牟尼佛

片肌雪爾尊法かどけり題出

玄実のそ〜る姑ぬ〜や窓乃山乃題正覺

阿彌陀如來

涼み寐よとあふ款清名や月の入

多寶如來







勢至菩薩

右よりや二十之長のそり月

文殊菩薩

初むと獅子やほあきし 尚哭立 文殊兒

普賢菩薩

進めゆくそむや象の御かきり 普賢

虚空藏菩薩

笠縫を傘屋もめらみ神無月

地藏菩薩

一とと乃浅茅はららや衆生縁 相瀨州

二十五菩薩

諸ろさるあはるまふ秋乃あら屋加乳

不動明王

御前立あしりもむと川瀧形月 泉目黒滝

宵の百れ悪魔伏了やわとと 支寸 相浦賀

明王弦繩の通アやそ乃滝 高八雄山子 三河

稻苅やさねを也敷りぬぬ子の繩 島 感

脇立乃髪もぬらさし花の澁 應谷中 寺

のけろあ加持の力やのさきり 齒 井平

降伏乃札もくかて 勝 や菊合を 掘 研



寶螺貝子壽祿を以て孝義又の那 同

八角乃杖休むるや牡丹の地 同

中央之岩にて白日や段々くし 同

岩角子利劔きふとく 鏡割

愛染明王

初深の壘よめくむや火柱ひより

三十番神

祢ま 在てのつけし寺乃曲太鼓

七面大明神

一神の形も教ある雲はみ孫

あまろふや絵画のお歌を七むすむ

鬼子母神

物ふきに母もあまへ子石福のれ

人乳をむるかへらん木瓜李

花一心をがれは毛かふたとり紫

故の中れ流生る子なり風車 雜司

汐風の名極を以りみ 蠶 袖 相州松葉

一日又造るやむの形解 鬼子母 大黒 稲

○諸天部

多聞天王



耳多ふのあへくうほありふりぬれ  
神卷ハカふと乃緒なり神の志

福耳小兜や一とや神の春

古梅のまの記を神子撰松芝金杉三街

龜甲の尻尻や神の古用平善德寺

千兩の帳松ちろさぬ師走う那

廣目天王

淡柳の杵小わろりせきひひめ

持國天王

さほひめや殿山ハ右や寺國乃楯

增長天王

薰風やあをひとくさ蒼小日一倍

摩利支天

猪の背に萩やもえつる正体

大聖歡喜天

御斗帳の内そゆの支春癸亥二月

金龍山本

若竹乃支を目まのや海流ち山

三寶荒神

尚宝と媚よ塩尻まの竈



平沙天行 而开集卷五 五 平石菴

婆利采天女

本とぢ緘乃いとり男さむし納め針

辨才天女

陽炎や御影ふ保て珠の中得竹生島

白蛇の蛇江相州を盛言

姫神乃髪所請の艶白清あれ同蛭求

案内して龍池怖す所れ春同のう洞せ清

蓮の実もおきめ不よ神の琵琶袋忍

餘同むさきて同十五童子の役とちん

ち同女の根や白蛇同ひとまる同寫の花

米船同也十五童子ハ陸狛涼

す同く同さ同ハ十五の亀弦同礼同ま同い同五同

生垣同五小橋同也神同結同か同ち同よ同む同

余同も同お同ち同し同紅同ひ同た同る同所同て同ん同野同川同一同言同本同社同所同

姫神同お同秋同乃同河波同半同き同り同奴同言同牛同島同長同命同

夕干同尔同を同神同也同あ同も同と同依同玉同の同顔同川同言同浅同草同社同阿同部同

輪同社同晶同女同神同う同ら同秋同の同仕同き同せ同也同蛇同の同衣同言同深同川同心同

近同み同ち同の同形同ぬ同も同ち同り同を同秋同の同衣同言同深同川同心同

岩同屋同ま同ま同く同已同待同籠同正同也同初同堂同村同言同野同里同東同赤同天同間同

平沙天行 而开集卷五 釋教 下少歳



吉備のくに大滝山名は小霊場にして多し  
其勝景を記せる騷人雅客の文もに就りき  
さまの三多しとあゆの緑小初花の麗き時あつれ  
てき納の発起有。二の句を捨てて使はると念也

瀧をの架め神小をけし春の尾  
正受の蛇くちあつむ蓮くれ待言已

大黒天

既中あを仕立いとひや葉の綿  
納め夏よ橋を一つ目な大根言本所一目  
辨天未社  
大師河原

夕紅紫大阿河尔又乃よ女

土筆はめや大師の一なるれ

むくの齒を梵字あつちをわの美あつれ

願満祖師堂在牛込長久  
山本松寺

お粥の満る志あつちや葉の綿

花のちくちくれを塔塔涌日か南

威光山法明寺雑司  
谷

諳によむ經もちてあき花野哉納于鬼子  
毋神堂

白雨の雲を裂通し経乃壺同

月名法也六老僧もあつち同  
帳内之雲







覺やうぬ目よるを震む歎驚の峰寄崎陽天

火消護摩

此道尔踏も相も螢式己未年上州春日山

爾時二字

そのころき結あもこと記すむ法乃海淨心寺中額

十界圖

瓜古如よりあ一分教目利式觀牛島長命寺什物

横道へきねておひふれ如とつあり同

發心附結願

秋風よ力の加ちゆめ也居士衣

其袋ノ表や去年のき杯ふり

數珠

西向よききき千名の帯せと

星祭

長生のかしと石付と小夜割

甲子待

甲子や焚酒さめてちく扇



俳諧而形集卷之五終

俳諧而形集卷之六

東都 解庵 皐月平砂 著

發句

人倫門

父

師をりりて父弛にみりり花の舞

母

初花はいそりぬりや母乃志こみ咲

未通女

おそめりの艶書冬はなり大サス攪



友

杖より出てをむくかきりや丹の友

賓

まれひとめ掃をぬ雪や片と畏の酒

老

竹ならぬ子とち翁や茗荷うら

○人品

武士

弓矢と伝日か目かく新や花の蛇

儒師

一とぞ能ああいや六乃道の花

詩を説く間の狂云花むくろ匡衡説詩

うらめし腹の不々々車文春宵言

預武庫陸澄書厨邊詔五經笥別

醫師

乎くさく乃名ハ花小なれ鳴也やれ敗鼓韓

進李解曰牛溲馬勃敗鼓之皮俱

初志わ乃き記よきおや茶とり言医家

農夫

繩なるを老小志うらや友の翁語曰不



樵夫

肩よりて腰分と志乃く木こりかれ  
木啄きの扶持あや充れ出たれ木

白水郎

塩くろくあ皮の大母屋小冬ハあ

枯蔦や海人の物か寸いさわ松

貝よせやうにと赤蟹の酒樽嫌

筏士

楫焚て妻やまつらんいゝと茶

匠

冬木立教をたぐみのいろはに  
夏山や曲るぬ道を飛弾ふと

塙匠

押ちろく平鑊や磯輪の雲南

蓋屋匠

棟折や槌音かちりられ匠

商

すくすく赤小豆又あきほ熊の革物言  
薬も店身をかこち教く月夜くれ  
店穀

紙匠



紙すじのおりぬきやちう時雨

檀會典匠武屋毛字

毛揚のかけ檀やま蘇枋乃すき原

補鍋匠日用乃伊加計奈

破袴の袴口や土孤燕かと

賣卜人本良奈詩辻比

ろ小人花又笠あううやさん

○四節人品

傀儡師春

身をぬくは小倉野ひろしうまららひ

紅毛人春○錐不載法式之書

横文字やちんぬんに花の又きれと

罨引夏

捺前を志はけの築をよめていま

小田守秋

小田もりやかくて乃めけのほられ貝

毛見同

醫心の毛見らるともや榎木株

網代守冬

下冷と身乃ある洛乃あるもの



平沙平行 平集卷六 四 平石齋

胡床かく鳩のうき巢や羽代守

夜興引同

傍架をわれりめそひよごみ犬

俳諧而形集卷之六終

俳諧而形集卷之七

東都 解庵 皐月平砂 著

發句

人事門一

謁見

初了貴彼尔系て紅燭尔半款の眠さるる夜

萩絃道猪も名日乃卧所かれ

月志乃や進み得る今一間

かゝるるにあふけをちやし牡子の香

をむりしあふめと色るる花の影

平沙平行 平集卷六 人事門一 三少歳



相會

多勢もき新端又立保無かな寄高間  
細きものゆゑや奥乃可子峰寄奥會津乘  
子と云入道ハ即きりこゝ竹方堂

故ありて疎く来け侍人のたふに心まけく卯月乃  
吉日かれを菜旦帳おろり侍りて

や一徳乃侍影言なり田植芳  
尖乃あ侍人も木立や存子友  
あ仙やまれ人尔膏屋のあも寄上州五  
夏棚に侍むも色侍身一物かゝり寄文車五

萍や一樹にぬよは春子風寄西許菴  
賓を玉と夢み冬葛の宿丙戌四月廿五日

尋訪

遊く秋や定は露の置至淺草新門  
未枯やおち一狐乃穴とをん同。秋二句  
腫るの小日かゝ立る茅の梅病三岱子  
一段と乃あけい美乃化粧代人作也  
夢ふ一依のへて平茶飲寄濃人  
空青とこれと傍ちり冬子寄西工  
あ仙に世帯殖るをむ居文百布子



寺にその首をうたかたし 神皇乃  
人參の箱より花も一 菊乃露寄  
病丹簡志小田原

唱和

弓取を又なれて江戸乃内々々哉  
故程を忘れをおさる雲の峰和同  
初鏝筑波も海をみ浅黄見報水郷之太  
子々あうを忽しく成る月乃丸  
ま柳のあは隠るる身出し加れ松岡  
さ不婚の向てありよき物我漸和古狐斎  
下駄印乃出了そ減らん雪籠王海吾蛙  
山曙

寒梅や和らふ時も江戸のまわ  
茶代をよぶや正月二日沙柳叟之狂  
風流乃雲旁々も龍崎贈常州竜  
攻むる若菜や待ん富士のや人還駿  
涼風も清るの弟子の庭坊松寄或  
猶自も冬通辞をへし夏料理賞卓  
園を出入強や石の峰坊竹和紀亮君  
露なう々平目と鯢乃甚呆那同  
鏡よりを聞きそ待也三日坊和  
一人宛涼光十日姑出一茶碗茶益  
狂哥賜



謝惠

花々いさ休めぬ筆冬八分鑿筆

此筆小日きをかしき持末乃松同

緬派新墨ハ旬少や古旬干調墨。甲陽菊阿

尺よりの研石裸少のこも硯

國婦里を忘や楮乃諸先生紙

をのわし城おかしきふまの扇切狂扇

養老の日剃もゆあし小六日剃刀。有記

よれ夢新門あたき持南々乃蚊枕

下々々香気あらしきくおひる存きん

万葉十四東歌 麻久良我乃許我能和多利 乃云云 見安日 うきま香乃あきうらるや

おかしきの端へもかせらに乃茶蘭平沙。報

文字ひの活て来新の蘭のち茶同。墨。客。報

梅之移るを実厚し雪乃客梅。申。密。曆。二。年

雪。為。文。子。遊。道。灌。丘。帰。路。遇。草。庐。見。惠。一。朶

鉄牛の争ふ土丹生於涼哉報。蓮。寄。之。作。鉄

かへ正む酒ハ九季乃春々々々酒

雲霧とあふけ挽溜一棗茶。活。法。周。愛。蓮。詩

馮。向。銀。甌

まゝの光ぬ蕎麦に妻あま美楓蕎麥。三。句。



食を探さ落裏とくそ母箇の梅報仙我

落裏剪をさく此一夫乃此あきうれ

おす秋とをの、秋より畏の麥平化。報

一呵乃練々久し一夜能蘭。報

牛も馬かへてあきせや菜乃花元宝曆

辛未やよみ廿五日一口仙乃まに古傘か 菜の花

あつきの根ちとそり練々をれ 菜の花

通極竹を串とちさちや大茄子茄子。報

夜も入を鳶小増きり初かつと鰹。調子。報

玉よりを何首鳥抱也冬何首鳥。報

目白つら瓜とあや老菟文章。有詞

ゆふ入や身も蜀江乃鹿子餅餅。家。候

干瓢乃卯月又あや木曾代衣乾瓢。言

乗機の様尔釣さんけち栗乾栗。二句

其力みちお心せり臺乃柳柳。報

奇殊底謂囉寧乃鶏卵哉伊加良。天

鶏まきに月みよさあやうす前句。

報紫冥菴竹瓦子。後

句報中山花什子

句報中山花什子

句報中山花什子

人事一五



水渉る布袋はくくらむ月の芽且芽。報調子

故柳巷かき母々庵隣乃老人身て年の豆  
打ちあされるるに謝して 辛未年作

神農の世話やきりぬや良男言老人之家産菜種

三竿ふるてまゝるの杖醫生散丹子まて  
豆うちをやしとあれを附ま二句

まゝとをまにまゝとをまゝと一ひひひ

張肱能お醫師柄より除扱乃升

稱譽

蝶蜂をまにあさむくや花の葉造花。寄淺草宮井氏

玉盤に志まゝる文字乃氷言書大字

時ゆゝ小倉をうつ寸濡系言一人細字百

誇いてかく人花鐘の銘言上三句

蟹の眼形ひくく呵あまはつ言茶道

油赤楠のよりはるわをも宿乃を言香道

瓶に立深山端山や草の花言立

矢とまきわに人と羽祢ある周扇哉言揚

慶賀

誕辰生子

梅兄かゝる爺の自慢や乳沢山辛未寄尾谷子



初幟其の乳より定たれり甲戌寄  
めつし久孫と語りや月の友庚午寄  
異川子寄

周晬

らゐそめや二粒三粒袴の背庚申寄

髮置 帶解 袴著並出門節

元服半元

菊翁や角を入るけ替古乙亥寄

石葛も多事て悦へ額髪丁丑寄鉄席子

初妻のこれより青し男成丁丑寄

文振や前髪金海嵐箱封戊辰寄

太郎舟容のくしきささのひぬ丁亥寄

名

菱こむ扇や巻の風ら扇壬戌寄扇人

種たろ之夜や抱子姉弟か壬申名清

入學

讀て忘れ身體髮膚汗は示野人入門

字を存やそれ任脉にツレ言人四門

謀をこれみん言人

婚姻

鶯乃自由なれわや組飾前丁卯春春鳥来家簷



門砂春嫁又馴きり男松抄乳庚午寄  
 粟捕を以り以港人ああ以勢辛未寄  
 りきやより内をあらす勢実入丁丑寄  
 相生也小喜を松乃知行言平霞子寄  
 仲人の宵わら国のわら氣り乃或己寄  
 初花独おさむふ色や家の奥壬午寄  
 突搦也人を雖事うまう国甲申寄  
 一對の鶴冬実極やさうら乙酉寄  
 陸勝平子

出進

武士の道にちひこれこと〜朱戊午寄

其鳴りちりり志海舞〜升の栗寄或  
 重くなる編織参りくや形勤辛己寄  
 文賀子

新居

種少く種あり〜来れち奥深戊午寄  
 いかゆい乃垣形〜や生島市同九月望題  
 新酒の待合とちり田乙丑題  
 羅や家天尔西子形被山丙田沙文子代街中  
 海借て月天をちりむ信己巳寄  
 梁の松に色あり形乃棚丙午寄  
 形蕃麦の人橋か々ん木戸一以院舎刃相言近

平夕刊行 行形集卷七 人事一八



白雨は来りてをわくきりあ居此庚辰寄河

住かへは来冬々馴染竹の音辛巳寄

町中に出来秋の穂や茶ふて癸未寄

塵のち記一箇や月に漆貝同寄

乙橋の旁留るるまや龍乙酉寄

一鞭を翼ふ家の茂同寄

秘徒や酒製一日くむ丁未寄

屋造や羽来車大曲同寄

紺足袋の郵馬陵子

是負我初さささ甲子寄

百年の苻帳いちのや桃花甲戌寿芝梶川  
張出して彩に涼し三種己卯三井氏為  
和も唐も仕入て箱の牡子庚申書林松浦

家産

寶あは山へちせ川忘

橋に飾はたお蜜柑加己卯寄

三飾は若餅よ同寄

鍼笥の縮縮ハ甲子寄

瑞夢

荷をさくや春の湊己未寄



三石齋行... 三石齋

初夢乃祿野はと袴や前弄壬戌同人夢

不考川や酒小来多味及乃夢己丑寄

煙松也七日秋夢の門飾子卯南佐

鱗々々隊も子森や菊の露辛未飯田氏夢

元日や鷹も二つと八文字丙子或人夢鷹

米指の艶もいづ秋狐己卯志

初夢や研文に如なる金と水庚辰砂上子夢

啼るとい貴人又此後秋の不二丙辰原氏夢

山々琉璃名方壺を出ほ露丁亥井花子

秋まきく乞待すり爰よ雲の布士己丑和句

事士と子縮乃孕みや閑耶媛應或人

瑞祥

門松や左乃枝に男又字戊午竹街鉄釵子

多に或や銭瓶栴の波孤月戊午独庵叟尋上居之地

仁宗皇帝曰糞滋五穀と子の日也寅有路上拾錢之幸因作之

あふれを必き人に福ありとハハつたの吉き詞

とやけ瑞ある人を福して

今日よりも身にそゝ縮みひりり哉己未與

出ま秋や栴も小槌乃あしり羊辛巳西岸木賈

さか娘の献上物や放水馬壬午卯中子縁の走

三石齋行... 人事二下 平少哉



玄風の徳尔な片くやをまの捲る

出事秋や影満てる人の告乙酉本氏大工街

蓑亀と片や云月雨子持同秀山公園龜生卯芳

庭の蛸物くぬ獲る子や蓬菜抱戊子濃二齋中

病快

身に取る湯利乃や角力の上州小幡貞

芍薬の日救ふらひ持肥立際甲戌寄人

乙亥年八月十一日英翁の病床を傍一占もて医王を祈

菜大根子高も茶持月の宮

充乃齒子妻のかひあり串抱丁丑阪三日快

古産みやろしや那須野の艸角抵水府斜子

蔕紙の巻けてや梅子ささる乙酉汀子

薙髪

改むる袂冬たけし紫蕪の艶享保丙午寄

櫻桐咲て毛尔を片く心癸亥寄豊

剃て出は古兵やさる丁卯寄東

二彌まて為き荅や冬牡丹同寄山下

砥水とを隈なき隈や三日唐午寄自在

とふみゆえ結車夏ハ辛未寄

耳際を羽二重剃や春の水丁丑寄



剝時乃氣量に石ゆれ夏座發辛巳寄團扇子

嘉道

実を遂く月尔何似や葡萄棚壬申寄或人

袴急ぬ猿くそよぐれ升の梅五乙寄或人

以く秋を讓はや鶴乃古急袋庚辰寄或人

年齢

手を撥乃五心始為至梅寄幸歡之間作○

飭竹雀の踊流峠或人之五十壽

延寶のみろり立らむ鶴子髪賀高間氏六十題雀

一息よ七代の神や春霞戊午為南佐子壽其大人七十

初射や四尔老きぬ志賀の波己未壽貴志沾洲豊七十

緑く川のえく返し申子庚申為梯超月子壽其大人六十

杖乃多そ所あり六十壽或人六

六十の齡やまをけむ同月

一八にけ末ふの米子又壽八十

八十の筈やうや谷乃花寛保辛酉同

杖曳や野道を花の國を移壽貞山七

た多長に春の片もまや鶴乃壬戌婦人七十

長生の下地々丈夫接種寄柴或

幾夏をうさの友や筑波や壽或人



目もよーや老翁勢門の梅守癸亥常仙六十志村

人侍てに米乃守や四方の新壽十八

姫桃の美生さ系梅子よもい或題或人

鶯よ恙身教や鶯の声延享甲子慈母信行壽院少長

ばちの枝の杖と飾や奕乙丑山其曾十子壽

奕いさの頂添ふ雀の年祝壽或人同題

数取尔初一羽津或妙或同

七種也ましくに鶯乃耳たもち壽或人

親梳の堅地か知を也壽或人

お生枝梅と稀なり齒の根或人

物老やあまらるる花乃女坂丙寅壽與予

有大蟹方三尺餘也七十叟食之以其甲脚掲於梁上自有辟疫之効則爭有疑守護保長壽之人即云

大蟹乃宵もつく表や老翁門

人やそら梅を杖とけく壽泉州八十

お生のまおもあま相撲觸壽露月八十

十片く此年満きり菊合壽七寄祝

初老の櫻掬をためも雪丁卯寿或人

花守や目角柳杖の物人六壽或人

のちのさやいろはを百の柱五或人

平沙刊行 而刑集卷七 人事二十三 平沙齋



初緑きそを御慈楚子代乃坂奉賀丹羽千里君四十題寄松祝

をつゝり杖の目利や六十乃春寫正成辰 壽六十

百歳乃春を足に出よ花の勢壽川越貞陸子百歳

衣鳥の杖たをみかすし六十乃春 壽牛呼舎夏嶺叟六十

騎替乃鞆遊を勢与友柳壽柳生氏七十

七十の七堂郵さけ兼竺題菊送多秋賀一醫生七十

六十蒼古松や米の春慈母八朔會夜雨庵壽或八賀菴

長生結習ひ方きけ冬の菊人壽或

直以源うゝ又々や小春の菊隱居 同

十少へ里結蒼々よねぢぢ備造 巳 壽 八十八

蒼守也春耳のねと下誓古壽四

為字の中も勢のよまもい加那 壽或 人

了々々を習西まきこのせさく回唄哉 庚午賀 水府人

種苜や升うゝよろけよ乃 集夜雨庵壽 林尼米賀會

弁馬のちゝゆる乃や杖 伊十子六十 壽

長生姉弟子も並居て梯我 壽 水府高 鶯歌翁

松乃花五蓋下片も流千季式 奉賀佳風君五 十齡顯千年松

入口を雜せ子季の坂乃蒼 奉賀水府白 君之龜齡

う志る厄はうへを涼東海 壽藤本氏 四十二

美松ハ産考ふ達とつ小女抱 興川子 壽

平沙千行 而并集卷七 人事二二日 三少歳



年も又青きをふむや杖乃外寿丹志

七言尔歌を久を扇南壽七頂十

小松乃与七十餘或種村松梅河

燈或冩或きの或若或如或翁或車或

稀或なり或て書或も或老或也或始寿静七十此或叟或能

喰或搗或や或け或て物或加或く或升或乃或米乙天或寿或

弦或又或な或して或勢或飼或付或ふ或表或日或哉寿

拍或子或尔或わ或く或山或あ或里或八或十或度同

年或ち或と或予或と或久或あ或き或相或松或の或下或涼同

滋或突或中或流或松或を或け或老或八或十或此或表寿河或村或梅

吉と冬或涉或年或を或り或セ或箋或始西奉或壽或磬或子

白或會或や或き或ま或て或よ或る或二或如或厄或落或し祝二或十或人

毎或商或も或久或も或け或り或あ或へ或梅或卷或頼同

人の手或に或櫻或あ或る或母或や或糸或乃或札十寿或八或

色或よ或く或や或彭或祖或く或さ或も或春或ハ或竹題竹或不或改或色

自賀五十作五句

維寶永丁亥吾以降。昡寶曆丙子人以壽

以或我或と或せ或我或以或ち或ふ或り或神或乃或留或守或居或饗

忘老

誰或に或問或ん或と或十或の或若或乃或冬或加或満或へ



交まぐやいそちれ坂の物以ぢり  
知老 求友

火燧にて 腸々々へきやう 五十回士 友同壽有

三〇松葉桑楊同年春二月十六日  
卯刺生〇五味以則同年夏五月五日  
予〇岡田米仲同年冬十月未刺生  
亦其冬十月四年冬十月未刺生

思親

又十手むりし乃胞衣を影中りし  
福藁の名菜まじりやふ代の友 或人 壽  
一日を最あつ平海為見可那 同

紅梅よ美くまゝしち敷初ふ形 同 巳卯 壽廿

若艸をたやすき漸なり初の乃 壽廿

六所子奏嗜むや龜乃年 庚辰 壽六 洲子高巨

坂もなりよそちり花の物走 洲子四十

臍の緒ハ古き宝やあゆこ母理 壽十一 壽守再賀豊

考を慈や子弦毛蓼乃花盛 七十 而一日千酉

八十季の奥や晚稻の作 壽八

老の部に入媒や染紙子 壽四 江坂水

梅引や取得る年冬丁又十鏡子 壽五 十

七十の上乃三つ子や菊比主 壽六 十 三



万桑のわよめかき目や八十度子啓史

福引や菟の手遊ひ武度おわこ来子六十一

断物名志を〜形れ芥の勢山崎千

な〜そち形坂や友菊千世乃道明和甲申寿信 州源方人七十

稀にみゆ糸もよ重り夏座敷十寿七

糝田の二葉ふれも〜八十乃文字十寿八

出葉蜂若つ〜や鉢安形糸のる乙酉 華某人母 寿浪

長生の免多子や千枝此菊丙戌 寿誓願寺隱居六 十言有瓶中移花之名

末長一年の八十歳を早苗舟十寿八

常盤木を必事〜不老門丁亥 寿蚕頭子 大人君六十

七参知乃葉枝継帯や松の花十寿或婦七 題松

長生や松の針溝尾尾も花十寿或人 題松

苗少〜形強さ見〜音り葉の松十寿六 一

菊もみよ年の穉も孤傍祝ひ戊子 寿七

積む和衣遊ふ尔やす葉小六身寿河南我考 雅士六十

たの毛〜や〜知す海老の春乙丑 寿四十

書初や米子備を芝前心ちん十寿七

又めんを岡や又度の〜十寿六 一

初老みよ玉小揚十寿四

やせ乃色や疎に嫗オナナの采一字十寿八 米礎子尊

平沙行 而冊集卷七 人事一十二 三少歳



標號硬閣

見遠はほとわ似よのし花の雲内丁起己寄竹  
 雛棚や海雲を揚は名有り計田戊午寄倉  
 鶯の響古ところや梅子庭銅寄木陽十最上子  
 麓にて芝草すみぬ梅月蝶記未多賀砂  
 名を二つ呼まれなうや花笠貞寄上州  
 勇雨や左へ持の龍の珠同寄左  
 表はハちれく書るし唐扇子癸所清文  
 篠もたきみさかのみあり竹奴人同篠竹題  
 餅の名を紫毎子すへよ冬接乙丑題冬椿

ぬをかへて床し九と繋る接種丙四子寄  
 縫てまゝ家の名ゆかし更太或丁卯寄  
 夕榮子不盡乃裳や下接同賀硯田君席上  
 柳子ぬれ立樹ちうや状便子戊辰稟之  
 ぬにかなふ阿高し乃写子扇子緑子柄子寄  
 人乃名の熟去てよや秋の雨同或人寄  
 燕や外子名のあり葉もひの辛未有佐  
 大木やかめり春きく茂み子珣寄水府文  
 花冬に写もも名阿る調子舟子又子清  
 今の名乃晚福尔あそ小田子友子同子寄子夙



芭壬申寄戸子支名ハ塚其十子ちうきり或人寄乃用カ  
 ちう或人寄乃カハあり或人寄や或人寄虫の破或人寄  
 名乃為の花壇同寄乃よ一同寄庵同寄交同寄榮同寄鴻池同寄  
 初午申戌寄や申戌寄お申戌寄よ申戌寄くも申戌寄名を申戌寄和玉申戌寄篇申戌寄臣申戌寄水申戌寄子申戌寄顯申戌寄初申戌寄午申戌寄  
 お同寄や同寄う同寄ち同寄い同寄ち同寄て同寄讓同寄子同寄や同寄友同寄取同寄巾同寄沙同寄文同寄子同寄府同寄  
 詞乙亥寄る乙亥寄冬乙亥寄は乙亥寄海乙亥寄わ乙亥寄れ乙亥寄玉乙亥寄の乙亥寄表乙亥寄玳乙亥寄砂乙亥寄子乙亥寄  
 一同寄菊同寄五同寄葉同寄子同寄乃同寄名同寄有同寄百同寄合同寄屯同寄呂同寄子同寄寄同寄般同寄  
 若丙子寄み丙子寄を丙子寄一丙子寄匙丙子寄き丙子寄こ丙子寄ふ丙子寄研丙子寄か丙子寄た丙子寄氏丙子寄日丙子寄井丙子寄花丙子寄清丙子寄川丙子寄  
 栗同寄む同寄い同寄く同寄芝同寄よ同寄ふ同寄み同寄あり同寄月同寄乃同寄斧同寄羽同寄子同寄寄同寄菜同寄

藝圃に遊文人東西教はとを待た

冬同寄閑同寄る同寄道同寄冬同寄ふ同寄を同寄く同寄山同寄畠同寄氏同寄西同寄蕪同寄菁同寄以同寄廣同寄云同寄  
 笠戊子寄ふ戊子寄若戊子寄て戊子寄乃戊子寄小戊子寄飾戊子寄敦戊子寄名戊子寄や戊子寄松戊子寄櫛戊子寄子戊子寄所戊子寄清戊子寄水戊子寄  
 時同寄を同寄名同寄も同寄大同寄若同寄く同寄閑同寄く同寄や同寄卵同寄酒同寄同同寄樹同寄子同寄寄同寄常同寄  
 魁己卯寄を己卯寄蕪己卯寄を己卯寄ま己卯寄の己卯寄れ己卯寄梅己卯寄の己卯寄ち己卯寄子己卯寄州己卯寄梅己卯寄名己卯寄相己卯寄  
 香同寄々同寄々同寄や同寄紅同寄粉同寄お同寄は同寄墨同寄の同寄高同寄然同寄暉同寄同同寄賞同寄善同寄西同寄砂同寄岳同寄  
 綿同寄と同寄れ同寄や同寄名同寄を同寄志同寄は同寄色同寄彰同寄象同寄の花同寄園同寄同同寄寄同寄寸同寄駒同寄  
 い辛巳寄ひ辛巳寄渡辛巳寄き辛巳寄名辛巳寄小辛巳寄橋辛巳寄お辛巳寄れ辛巳寄や辛巳寄杜辛巳寄若辛巳寄所辛巳寄清辛巳寄匙辛巳寄杜辛巳寄若辛巳寄  
 耳同寄ふ同寄入同寄名同寄を同寄あ同寄く同寄る同寄な同寄り同寄角同寄力同寄乃同寄考同寄子同寄寄同寄函同寄  
 腕同寄の同寄き同寄乃同寄名同寄の同寄子同寄乃同寄そ同寄毛同寄見同寄其同寄前同寄同同寄寄同寄子同寄寄同寄函同寄  
 咲同寄花同寄の同寄名同寄も同寄地同寄道同寄乃同寄の同寄青同寄菜同寄小同寄菜同寄亭同寄長同寄孝同寄子同寄新同寄柳同寄



以後一於名を芝飾挿種我同寄雪芽思  
 街名一人乃猫冬なう尾申奉賀  
 篆字尔まま到ぬ名也今手乙酉寄  
 名を聞く出形也門尔三日好自同寄宗  
 よせくよ身ハ朔梅々ぬむ名我同景洲子  
 撐まれ名冬秋よと友何を丙戌寄四谷九  
 玉を吐業也聖老乃系海丁亥寄鳥  
 一と心我門乃志まるや改躑躑同圃角  
 系忘早起和常の名小あるす子所請  
 會筵初會納會宴

朝东风や卷の紐とく壽老人元文戊午正月  
寄雪明辰羊素

墨筆のその具かれ新菖蒲同庚申寄麻布鳥  
好子家業書李

梅咲了例の指方也隣既延享甲子正月廿三日  
照草庵結蕉門講取作

吳魏蜀於月雪片とぬ華尺會壬午賀硯田合  
之雅慈滿二百

之乃糸の芽々敷々とく接穂莖百五十會二  
戊子壽滿二

出雲よく集備つとや神送丙子賀春來子  
東風流竟宴

句數

ぬ荳尔詞流尚師走式附上州釣浦三千  
後詞出文章篇  
 茅垢乃古羽浚ひや雪月花朝浦亭千  
句弟一  
 智惠捨と実と結とあと一五千言賞字都宮北  
平五千句



舌乃根を矢に継ぎ高や番賞椒吟三千雀獨  
産苞尔一間迹や時多試律吟之獨  
之の系深魔おいとるや規狩書萬句水時作雞子二  
後

万句

家照き玉の仕揚や白牡丹享保十四年己酉四月十六日清水超波具行

も縁人乃心根流きて荷や麻同廿年乙卯春富岡有佐繼先師之業設會遊貶

運くても君おろも日る友を同今年村幸徳為居此業敗

玉苗や磨ひそくま手水の隈元文元年丙辰五月廿六日岡田米仲具行

々ふより我南指らるる花車同四年己未春轍魚貫具行

文臺にほくや十束の藻塩子同夏右江渭北具行

出来秋の根きく也又月潤月同五年庚申閏七月六日堀尾和專具行

光も好弄我ぬくくもはるる花寛保三年癸亥春森再賀具行

吾種也ち忽乃海よる心太密曆壬午六月二日武内環山独吟具行

諸體

伊勢き出は音も譜代替蚕時小山桑水摸桑翁之体卷後附之

湖浜枝川流きくたひおろく題源氏物語題号之句合

いの字かけ萩ち我ぬく右左題笑斗女以呂波冠題哥仙之首

か寸綱の目に弔くや春水虹題五色冠題之百句

新酒や七福神の孫まを題祝詞一卷之後

誰りある顔又せ衣装衣配言顔見世句集擬歳旦引付



紐とけを江戸のきほくや友袴古梅子在浪華一巻有東都之風

年籠諸篇朱點積數第一頌併每西句

富子ほろろ長しちの日の神たろ之元日

福引やぬの奥まてに大文丈同

強弓ふる年玉苞や塚守日狗

天よりやそ年玉吹矢哉同

何しや矢を麾まてそ如衣物代猪日日至

卷藁の二氣芳しゆみけく免七日開通用

氣霽てら點滴小務も繼このあ同

梅尔酒水飲までより恵方さ牛日日至馬日

子物ハ後小あそくやうの薺人日開

七種の日をききまりや爪印同

まの探る夜的の擲きりいり改年初點

編集 冊子

百生や一はゆりけし蔣千二子元西煉文旦丙辰

野津ぬめり府車四辨乃の雲羊を笑批秋改百

病ては影さす物や月と氣門人貞喬為病伎

藤を孫かき乃物伝煙霧の瘡疾を

墨跡

一幅のまも呼浼年忘安田随成子得密井子之西掩が開句之一幅

三夕川行 而形集卷七 人事 三十一 平沙



祝と子乃と並々家家此花附植雀所作蕉翁竹  
植日画賛記之後

祝

一花まみ千代のと引や深緑寄松○横地  
楚山子所請

専ら長し龜ハそ方を城構へ寄

祝ひ日乃百に何ふ影や松の喜仙我子  
所請

新あやめ石菖五身の世話もか言海子  
所未

いちひ日を餌に捨ひ片々其乃鶴寄

三子葉の掩乃系引や松結陰寄髻

出立秋乃家より残る加まとう寄田  
家

床わきま俵いちふ世村の妹同

孫勇孫乃と熟へ起門やひつち寄或  
人

見時如白水飲則勝丹砂八十老翁面春風二月花と

うねをきの酒もむ此更ハ破尔をを承しむ

あゆ酒め若に似合ち一花の也己卯正月十三  
日寿即英翁

いぎ祝へ概結紫末乃忍むを家芝立扇子卷中  
有閃刀紙寄題

産れ日の末色此氣味金銀花戊子五月廿六日  
寿律山子誕日

けまろや乙子の羽ふり家治冷同寄平沙  
子二男

交傳ふ帯や玉乃軒あやめ同上

初夢の共末廣や松娘庚申桂步菴主  
撫扇有西松

苗当坊留不持る支那の雁庚午越善夢王子邑  
耽女平波有結婚



十のくアとの花を乳房小瑠珀丸壬戌寿上州釣浦子  
令坐歸武陽寄菜品

哀悼

七年望すき涙や柳の臺享保七年壬寅四月六  
日先考石川隆貞七周

越おふ傳や那湏の檝享保十一年丙午二月奉悼  
長井紅葉君入有佐藤花集

五十手毛吹鍛ぬぬ土用か赤享保十四年己酉  
松江重頼五十回

飯小壇ちき世かきり乃枯野享保十五年庚戌  
悼或入魚文子所請

あきあさ秋机撥はや享こわり同十一月十一日悼小  
山厚佐子令玉増

孫のまに今や緯極乃大法事享保十六年辛亥二月十日  
祖母石川昌順五十回

餘花すこし十小七つほま向物享保十七回  
先考十七日

名の木ちり移らぬ鳥の寄ささ九月廿一日悼叔父  
石川隆徳有哀文

石切の通ひし泣や寺の秋同初七日淺草珠島山麓  
審寺墓下吟九月廿七日

数珠持てともおく人の時雨十月四日  
二十七日

証一川代と人のなき十夜哉十月十一日  
二十七日

維享保十七年壬子十月廿日書法初学の師幽翁

平田無下先生十三回也長月廿日同門諸子與等並年

山青松寺の墳墓に花水と荷の沁思を報寸先生と

越州人学書子首藤魏山氏好談林俳風享保五年庚

子十月廿日没于京橋柳街門人忠次之宅年六十二辭世

其心其期介成天其覺悟先曾礼迄者曾礼与世乃中

跡の影をまなすの下の下もわら



入月夢道一をちをかみけ 甲寅九月十二日悼桑三畔翁

とめて師のおとけ 同中

と向ふ西盃めふハ氷加れ 同十二月廿日百箇日

攝待子手傳小法の薪哉 周而一夏吟言予助其善寫

ゆく秋をとめて汲んふ向水 先師一周平河山法恩寺墓下吟

清りちり 鈎乃涼し起影也三途川 五月悼崔海一漁叟

白蓮に眠ゆく草や三平酒 五月十五日厚佐三周

酢和ふふ三年の秋乃匂いけ 先師三周自編集曰三盃酢序在文章篇

きん々茶を名とハ別儀のふ向け 十月十三日六益仙青峨七周

平假名に色ハ沈あり 悼駿臺泰國君令正

さくもきに驚く夢の浮世哉 十二月悼悼立來川叟

あきく耐ふ氣乃ほ雪解り 秀水

落汁を々々の佛けり 六月二日五味春雅翁三周

きん々人もなき侍や枕ぬ 悼其畔子令兒

一廻向友なく鞠く扇 六月十六日悼箕輪其蒼又有哀辞出文章篇

手向ふや燈籠を牛の糸序 九月悼飯田南溪女哀辞在文章篇

月乃秋くねも烟のき梅添節 悼喜者

世にまさきま今日のお禮 十日菊悼寺町安明童三周

寝積や二日を死出乃道 正二月二日浪華舊徳翁没

竹の皮ぬくや此世乃 悼或人



平瓜の如くく 子記別集 悼園二子 令正

洞贲子 世稱 灰德 冬予と同年共小鍛門外

何てお向ひわらふ 哀れさむく にもん成

ぬ 苦子先世を去ぬなるを 終のいし

かきさるや 一句を以て 彩を借き

竹馬やひより 瓜すいぢりなる

金色の襟又 指染黄雞頭 七月廿七日悼 深川鼠肝 翁此叟有以扇挾襟事

長月終いさよひに 人ら照らめぬ 同日同向

飛鶴もおよをぬ 自然あゆみ 悼平野 雀歩子

大粒赤露をを やき別か形 己未九月十四 日露沾君七周

暖蒲よりこわきく 水よ一めらる 雪童 一周

鶯も長き眠里入 音哉 庚申六月廿四 日悼或人

我等もかきく 息を秋の風 七月廿七日悼 庵起波叟四句

又月尔惜ひ 本を失ひぬ 送葬

霧をくもひ 泣き棺に 續々夢路か 送葬

あきかゝるや 月雪まよとて 霧烟

百年冬水乃 泡ときかれと 一服前の子乃 潤成る

挿待也 其なる身人の 意々 門杜牛十 七回

名月也 獨とみ 小字又て 知 明夜懷独菴 四十九日吟

那星城と 糸目あやさる 守宝井翁三 十三回



心きく推てもあらん時雨以 嵐雪翁三十三回○以上二句人早楚宋阿集

石小名城後して諏訪の水乳 立独庵碑於日暮里諏方社頭日作

あき心を忘れ寸小出よ慈あ 甲渡某人 悼會津

極樂の涼し記はまや石の蓮 悼宮口 泉石

ぬき笑ハ一川晨や石の蓮 悼宮口 氏父君

名をうり乃柱妙ひなり 悼蝶夢子 母君一周

世亦移り世故又去勞冬乃蝶 十二月悼一 鳩林午寂翁

本年九月十二日先師乘舟七回忌に當たまふ

終りに朽庵のまゝ命有て綿葉のまゝ向きお

あさしぬとまの志を継て其碇を搦をむらふ

面影月物あらしもさゆ秋乃色 悼旦 悼宮口

あへなくも尺ゆふ正月晦日乳 氏祖母君

以ろし 幼鰯も記念を古羽干 悼旦 調母

とかくして骨も消えん秋之夜 弔独庵 妻三周

あき人もあまりに板屋のあぢ 八月廿四日悼 文石妻常十

秋の日小弥陀乃るひく泊 悼尾陽 竹子

南天の實を思ふ鏡如あ 悼芦雀園 貞國妻

松茸に物語起く小春の乳 弔或久 五十回

芽をもてるを櫻慕を 塚下 癸亥寶井翁 三十七回

ち熟梅をふらむ 花のま 奉悼多 賀君



醴やなきとる月は枯下

弔宮口龜及父君三周

疥の子やめとる星米日乃物憂

弔同氏祖母君一周

ちまき乃根もち依や世人の一周

弔其江一周

揉瓜や諸もち依く親心

悼蠶齋愛児

こゝろを老の身はむ終死

悼堀尾調和叟

あゆみ〜榮友と蓮尺の取揃き

悼松可子

身の本城思起出を身や汗拭

悼文石父二十七周

夏ふ〜に身を救ぬ身も名残死

六月廿一日悼熊澤氏父君

おとらよよき日もう〜和柔のほ

悼南佐子令正

秋乃系をのひく撥出と撥のれ

悼或人

ゆく秋や雪もろち乃老の坂

悼北川草希父君

よくきよのつ岩火の果ハ光死

悼風窓中日進法尼

枯色のほう歌も〜起尾卷死

芭蕉翁五十同悼義水

墓水や夢理ぬ突も新厚氷

子一周

和のむち〜て驚く月日死

延享甲子正月廿九日宮口氏祖母君三周

打わけに譬よ鳥目涅槃の日

二月望友石子一周此子有圍墓之名

一切〜となきに定て接種〜那

悼或人

折際乃油汰や名木の初さ〜

二月悼志村長雀子

考〜病葉をふり〜と〜知月死

悼鷺舟

文臺尔よ依力を名乃ちち飲〜

六月悼文石子



蚊屋潜泳ぬ糸おあふふ向也六月悼河瀬

ななき魂やせむるて意月の容老鼠翁七周

肉光やりの心とへ葉の料理屑九月廿五日悼文峰妻三周

ふ垂して露のふ向也歌袋悼貞國妻三周

牛馬のふまぬ木乃実よ恩かへし弔叔父石川隆徳十三周

水らゝね早來迎の雲孤脚人悼或

あをれきや齋を儲系同

衣更着に一種妙な侍佛かたな乙丑二月五日悼西宮竹止十三周

千躰乃佛函くを木の葉也十月六日悼風窓尾一周

澹返て念佛うくむはきを系南悼或

大船に栄一覚悟の彼岸かた同

鏡餅りれく焚めぬを焚くもれ丙寅正月廿四日悼巽窓湖十叟

道の秋七と勢ふも病かち甲独菴叟七周

秋菊有芳一己心母悲風の為小形を失ふ

ふと有らるを培ひ暮すの道ありてませくかの

色香をもちて一芝跡去てあに十三日と氣

今小芳芬きりたれふあうら涵きて其苗の

碩あらしむとをねよら

盗みくも味のみ弘めん作て系栗翁十

雪の日故人をさ引か磯乃霜十一月十三日六益仙青莪十七回

三日月行 平砂集卷七 八事 三十一 平砂



木狭りむう〜造りや梅の門丹羽墨川子大人

塚をちや過去の〜れ字に柳哉巽窓湖

橘や花を本音の時代を四月市村何

聖ま〜ぬそや卯屯色江家祖五十回

とり上教菩薩もをや〜秕稻悼牧童

木隠れ〜ぬ声や霧乃松奉悼石川

花降し〜るふ布施の花咲ぬ信州瀬下玉芝

諸鳥のよきとをや菽撰傳延文辰三月十八日悼

序跋から懐教くぬや煤拂野口雲帳言帳常愛箇鳥

稲むらや並ひ〜早稲々枯果ぬ午寂翁七周弔

古松の氣を懐教松落く九月廿七日悼青松

僧呼て朽けく〜も舟様信州瀬下

蚕まで焚〜るし乃朽柴十一月六日悼

鼠尾子や雨と手向り千足盤谷雙

夏菘乃浴〜るを浴し酒の家五月悼野

春風や軸に色ぬは繪の姿庚午閑雀

奇栗も漏るを着乃〜き世悼或

夜第や心川君の夢のおとかけ文石

及竹の節やむ〜れ玉古土佐大夫

松露も〜もろ寿命也悼或



を借てさむ秋乃葉抹香同

露かとりかちめやけ居士衣鼠肝叟十三回  
時題画像作

うかりし月乃るもあれ師の光桑翁十  
七回

墓守にまじゆり酒價哉十月廿四日詣二本樓  
行寺室井子墓而作

よるけの子美鳥結名や經の文虎主  
悼

かろし子工み教てや哀紫冥菴竹瓦  
此子有文才

櫛も禮記も悲し子規哀願菴藤治  
先生之愛女

暑さとへあくて持人の持仏四月八日鈴木抵宛  
豊没七七回悼而作

集めもく繪も功德池乃蓮り露月  
悼豊島

か寸福か乃きく朽し老木か南悼或  
人母

と手ひのぢれも也眼を患て大る病了漸

いゆの町家母病に卧て例も寸日く歩を

如て醫療を計命なるが六月廿日未刻

子長きわもませぬ

涌出流に志る勞あつさかな壬申六  
月廿日

廿日三田常林古に送るく葬法名繁室

貞昌信尼行年七十二也廿日送云に但せて

下谷祝言等も信て諷経をあも初七母の

庵不をと信嘆吟二句

約ちうら形尺となりぬ母乃故を



吾故尔も告侍我々母や子

七とせ乃及故不梅跡魚を依人

消一ぬもろふて交依睦月かな

為様尔命毛尽ぬ笈毛筆

表風の外にふる鳴日や賣櫛

水江月に秋進升よ依手向式

子方へや侍をぬ言取

月を妙香や三むうみもの

経文を深依雲おり秋のくれ

は理とハ不化旅もかくれ秋乃かせ

巽窓 七周

悼西宮 竹枝

悼遠州立基此子各百句于薄 様之冊子送以乞評往來不煩

悼或

立秋日須臾庵主 甲独庵十三周

同前七月 廿七日吟

永我子父君一 永三十三回

悼或

上品を須弥座へ坐れ菊花

春の似こ小夾の夢や弟子沙匠

面影となるや郎巾もほ言

ちれと猶留守の本言梅在

ぬ上の昔をそくや木芽和

送るハあうまし梅の擣種式

塚形手ねらひもかけし秋乃ぬ

かく暑き日なむ我母の粉細工

者ほしや母乃縹さを数珠の俣

果報よき墓や六月筋

此日常林寺墓上子規数啼故有 厥感即作此句由子石豎而去

同

薩摩外記大夫廿七回 望太廿七回左内二周

悼江坂源 七一周

癸酉二月十六日 露菴之尼没

和階堂高井立志五十回 謂之二代目立志。立路君帯之

悼馬陵 子家君

悼五扇 子愛兒

先妣一 周三句

同



法乃名望なりし娘や園子

八月九日弟門人平波女四十九日

是より孤基も短夜や人乃果

悼異川子

一時の追うく我日や切回向

何文百箇日

十月姑息いろねり佛うれ

悼或人母

うつか木乃香も佛なり雪灯籠

貞胤母十七回

夢や娑婆乃古巢の一調

甲戌悼本間曲蓬子今嗣蓬武子

花小説要や佛語一件

悼或人

入おの花や流経盛こわし

悼水府南溪子父君

惜まろく充の又もつや梅乃月

悼四谷且調子兼翁門人之逸士

樂し美を極老く塔や華の主

悼敬仲

帷子に悔跡三と粉や宵晨

平先妣三周

夏葉や玄衣の舍利乃一糸

悼六窓子母君一周

蒼木に一葉を夢の煙かな

悼麻布一医

百日の卒都婆乃空や別ね

我毒

疼もい妻あわきれ越芽莖私

悼或人妻

子乃夢をと起て跡ふや秋の

悼或人

墓守も立向ふ日也木と新

同

すしきにゆり起名也歌仙貝

早野宋阿叟十三周

付乃きまて皺あし反照織

悼或人

病葉に回向わすす古き

乙亥追悼或人



餘毫散や口約束も無の一字悼右江 渭北叟

秋風故使や弥陀の國廻九月十二日 悼友以一周

字もや帳尔一めり 悼辰生

問はくは跡里多きや小冬悼總齋 故一

いひ持り千部佐長や冬角力悼築地 五陵子

毛藩固にわれも居乃老蓮の座悼河田 田耕子

おとくを枯系艸木や経乃文字悼枕之 一周

鳥乃巢やうけさぬ墓の五十年丙子二月廿九日 寶井其角翁五十

田也。墓言三田二本樓上行 寺裡之墓也看祭又出文章篇

馬陵子乃母君を悼める也言三句をうて哀を添

しむはるは細て一帖とあり名曰後 形見其始は行狀記あり

終ふ五輪の吟る是より生芳の慈をあらわし没後の

面影を系ふ孝哀の至といひいへし能信の真といひつる

そと香枝録花みおとわく充の果四月晦 日作

固扇おもかへてや墓の青嵐女朝三周。懐 此婦不堪暑貌

悲しひる根尔玉香や蘭の秋悼少年木 布布愛蘭

干瓜の塩や日毎乃人好果悼或 人

文月と忘れぬ人や他村の序百花莊潭 北十三回

怖きわく捧ふ枝なまは枝妹の声来翁二十 三周二句

筆法を人乃もて流す泣秋枝



鶴のふむ土も三むうー冬乃松 十月九日追悼 家城氏父君

車座を家乃面向や冬桜 十月十三日嵐雪翁五十回也寄花乃 是吉吟句贈淡州阿州之服部氏

十月乃花や夏海の爪あり 同前

已向ふや充又多くへ一初搦 丁丑悼長島 宗久八十二叟

そら夏持丸尔小槌乃審船 正月悼李下齋訥子一周此 船郎者乘翁弟子而入予社中

那うかやむうーをささ 種袋 催砧二 十三回

夢さわやむちるるを初便 二月悼水府 仲山沾搦子

悟さや拵さみうー餅の白 悼兼芽妻 中陰後作

嗚このよき方ちもろし香乃玉 悼可好

まこ涼む身乃秋なれや 悼其推 長男

炊あにちや減ゆくや々季米 八月四日門人山田砂分没 今也弱而有才故哭慟

雨雲望来て消きり花壇の名 八月廿四日悼門人 幸有林砂嵐

露なれや櫓に々ふの向茶 八月十四日 門人兼芽

とふ々物や朽木朽流々葛の秋 九月朔悼七 十八叟帶江

諸新音を々々々冬搦 觀世捧 庵七周

言乃柴の形見死々や冬搦 弔平次子祖 母君百今日

七絶の秋よ佛乃心き々 寄葬悼 人

古き名乃人の又果や雪佛 悼梅國子 水国門人也

年乃矢若塚やあうし老の墓 弔伯父夢皆翁十三回 延享乙丑十二月十九日没

ゆくまや分間の圖を終め 十二月十九日 悼松葉兼揚







兼尔札之十三首と云く

望月燕波子  
田君卅三回

忘律一 秋を二十五普門品

来翁廿五回  
追善廿五唱

晋子の廿五回用をわく時諸門人の老ゆくを悲して  
花梨の雲をけりわく年一和物とて元老所の  
門人も各白髪新なり我又さう一語の施まなれをほ  
せ心ふさぐんとして

一日乃数珠も方の露歳吟云

あ梨や此時不味入と戸口

落をうり卒初婆ふるく山むくぞ

白露をみらみ落すわよの活氣に第二の沙の

さかつかむす

をまかりおれ落そ我は乃鏡あり

或時師曰くを引かせせむかろくそ我きくぬ  
刃にまみし今持たるひしてぬ

くもる即於案山子を存く次笑ひかぬ

其苗必根尔おひ生なから晚稻かか

師乃あと後み婆依あそる秋の夢先師か

仕りけりある始ちりを万戸と名づく一年のまき 誰かの  
ありあつるを 婆をの報業せ凡三代乃婆とよしお  
懐業のたより  
くちちちりぬ

沾徳を悼める句に衰菊のきを綴るるを妙一字と



妙乃字の口あけて元よ新酒樽  
とあらしぬにあらまや斗に粟  
庵下の丸双をよむけ所難乃日

江島の松飾を趣をほるに松をよむあり  
とて羊のぬき乃をよむに松をよむあり  
三飾あるを元面けらるるかく推鼓かくありし  
事よほとあまきくひなる

紅葉道一一句の為は草履旅

雲の名乃未系糸の糸一むつち  
出迎ふ山の名歩りあり走り  
懐師之  
平生

隣家の小兒小形次郎といはれありしにむく賞き

あらしぬにあらまの友とせり

よみわけや猿尔あせし枝よりみち

魚をまにや十一日小菊檜  
平沾徳百个日句有謂  
九日菊十一日者檜哉

け石の弟子とあらしや寺乃秋  
寺言本所平河  
河山法恩寺

云々お紫砕きいしく小石臺  
言師家所  
有之凋度

枕をよむの形見夫木集  
言坐右所嗜之書名也又有  
名所和哥集蠹集通俗志等

あらしや寶永以乃唐紙摺

初汐や雪の目利を伊豆乃旅

あむらゆや牡丹の分根菓子袋



白作上の五歩又棕多してくわ  
由送乃駕もゆふささし忘原

いろうし久月たてきくま向哉以上二  
十五唱

恩多於華足りあま教葡萄菊九月廿一日  
父隆徳二十七日同

葬禮いりて群集まる人の押あはちと衆をなつる此

終終とおのへをたけりなくあまれしや

言さふ乃はくくも言し秋の風悼栢庭○九  
月廿四日

念仏乃去ふに似まり六のち十一月廿五日悼  
中村冠子一周

舊事の名を吸むく小橋橋巳卯弔桂坊  
泊山変一周

隠栖をといさむねも休むはたわふ黄糸の根立に

聖衆来迎をまうととるし今一因のまのするはと成改

面影を沓足袋くたむ給かふ

七指乃箸折足さむ灵祭七子之送吟入于徒衆固集時  
附此句以弔七名畧于此云

喬と減鉄乃著木や人の果悼堅嘉延叟言叟常  
学断易用鍊線之奇

酒の名ハ讀誦尔成一葡萄衆翁正當  
忌日之吟

之昔乃夢や火燧の下茗土甲戌人  
卅三回

跡尚み跡を懸尔はくし一殊乃風悼金龜菴  
常樹子

骨あアてうしや卯月の古扇庚辰四月四日哀  
伯父川上叟英翁

ゆく水又もきほ蓼や根あし六月四日悼門  
人大坪圭砂

白ゆ尔卒物染も及故と成にり六月廿三日悼  
門人中田砂ト



月まちて塚又掛をや東坡笠 七月既望四墓叢之中  
西光寺中六味翁之墓

現在の果を尺よ墓乃木炊籠 浄心寺内  
乘也之墓

斎日やそおいて〜猿を去又乃 惠然寺内  
砂上之墓

墓を去新溜魔糸に秋のなり 賢法寺内  
定花之墓

病の菊仕立ぬうち乃嵐哉 九月二日哀門  
人豊諸東二句

行脚とぬちもあちりや死出乃旅

先師の女不面をさう〜もか〜と〜二と也  
くち正ぬれも又いつれ乃むた〜し〜し〜  
何の〜りの〜き〜け〜まつ〜んと〜し〜し〜  
か〜まく〜り〜し〜も〜香魂をむ〜う〜あ〜れ心〜を〜た〜れ

もあり芝波茶の給仕〜ていませり時をさひ  
也あり〜

雨乃月海を夢見る人と小盃 速夜

露霜と文々や二十七回忌 正當命日

あ〜ち〜し〜詞をま向古角力 悼木村貞  
橋子一周

戸の外れ昔をゆや玉まつり 尾州某  
人三十三回

鳴るは一年又一枚を秋色 悼齋藤藤洲子  
独庵門人也

わの汁にあ〜せよ塚の五十手 寄信州  
歌方人

犬蓼や飼ね勞孫乃ま向草 八月廿日祖母妙俊五  
十回〇祭文出文章篇

採草子老てあはれ名やま向乃日 九月十一日  
先師之墓吟



月ハ夢壯乃人弘冬こと五

悼田耕子七周

六ち風乃氣告々や人のちて

田下室子

墓なりぬ名に就くむや石乃露

超波法士二十三日詣于日暮里之碑

ふわもゆあすましくわし墓廻

尋三崎妙法寺内諸東之墓

紀子病中五嶽の圖を贈りて嗚呼五嶽と

幻相を現し一礼はかみ空吟となりぬ

干瓜堂干々や海邊即々々々

悼慶紀逸叟

古地白古き茶や月乃影

追薦老医和三子七周是對月向昔

年暮て日數尽むや初と北時

臘月廿七日悼白鹿豐九子父君七周

糸鬢乃名尔霜少はや五十年

古中村傳九郎五十年

ち心毫を抱てあけよ切檜

葵末悼

深尾子乃露や乳房結恩加へし同

と摺乃中かなき名や野の海

悼吉田魚川

十月廿日のほ足揃ふとをし古風を言守乃て

はらる世くといふれも耳立はるうにやうし

今七とせの顔せせ成ぬ世にまきをいみりせんわと

はらる世をえう一人も愛親か

悼伊東書永七周

大字かく友こ持お古(等乃水

悼松葉葉楊有手文出文章篇

孫曾孫乃ふ向や頼て俵芋

明和石印鼠肝翁二十七回

短夜や命毛尽て一件

悼一浮菴永我子



かのきーやまもと身招く前花桂坊沾山

辰物にかち存や秋乃蓮の座悼嵐屋

妻をぬぬ古き玄ありのあり道哀大場寥和翁

名りごとく新酒を以ふ塚の口吉田魚川一

弱知てとぬふ秋や之十三とせ叔父隆徳

珪雙蓮之とびー以の点式も香茶花菓子有る何て

ま来瓜香を尔茶も乃ー世かと甲珪琳雙

其墓尔时雨添て也常念仏浮山外祇丞一

木枝の訪て問新く老木かな悼菊且

子父君

世の秋也利ぬるき日をおかろし悼竹内

花まゝぬ昼寐も長き眠り乙酉悼新

父没して五十年世か謂醒きを以て祭はる今日猶

いも何を幸とすも恩のかきりなきをあり柳亭長孝

一云の具へ方をたるとるのころをせり

實様やもむけ納者乃赤の飯先考五

平沙子於家君神田にあり十年回

ぬまふ世人の花あそぶるあう持言くいつあき

アにアもぬぬありあしとあふ人愁眉をむきめ

てうらさほまてさかくしてまを郭る志をかろく



声もいつとととととれぬ招平沙子のたけふ成下

夏草や橋もつとととと 拈佛堂 四月望七七 同向之作

わらう紫の城や一木の元下地 悼越前鯖江鈴木琴佐 一周口先師之門人也

一封のま向や香乃船荷物 悼鳴海鉄 豊一周

一線乃経とりを秋のゆ 追悼 或人

うら言ハバハ迷くわ月姑新 悼拾翠豊七同 弔文出文章篇

山と見ゆ壽も夢なり也夜郎巾 悼莫大子父君 九十八叟

名や三季衣かつき市へ今ふゆ夢 魚川 三周

十月竹林方に後一わかついりき法蓮ふあひく  
珍膳の供ふ列りてを謝し二句一語法をくは回而一きり

初冬の花ふれ俗も散飯乃り

無漏路へ乃一言寄一状仗 因以應甲陽黒露叟 之無弔聞半子之七周

惜哉八樂庵主老來無名之函傳了名有きれ

多や古筆これ冬とちわ大用干 哀岡田 朱仲叟

遠き名乃花壇尔ゆのし細字書 悼木村貞 橋七周

ふは事をおさるきくよ宿乃秋 桑翁三十三面三句 弔文出文章篇

一代記のう速夜冬長か

師や簀を易尙付予ふ竹窓子をあふふそそえ乃を哉  
これを蔵めて今又在閑きこれ心裏痒し

兼て鳴人かしく秋耳掃除



手向流如新 持かき 控神 柳 此月予門人亦亦追福因贈之

楮と成樹と名計り 結芽出 一哉 訂交 弔砂 汀子一周

ふありい乃か 弟ろふ ありれ 春 坊 風 悼平沙 子小女

花も着松のいさき 一 名を 朽次 悼小野雀史 八十一叟

二日 灸 額 多々 世乃 獨注 悼平枝子令 正訪中陰

子をうれを 母いす 惜む 田 草 哉 悼砂山子 令正井榮

龍眼寺之石窟塔其功高其名不朽

新種之之とせ 若流者や 墓乃 秋 八月朔悼平沙 子祖父君三周

与身 汝乃 日記之 十と 長 漸寧 九月望山田由林叟没 叟玩阿佛日記故云介

親 猶子も 汝とへ 谷乃 雪 灯 籠 弔米仙子 嚴父一周

汝とふと 爰 汝や 年 の 流 山 六月織 敬普没于東総越 舍涂月江都之親友弔之

雪 目も ありと おへ とも ころり 友 羽 織 砂山子 内人一周

唐相撲の大王とて 威風凛と ころり 形も

高れ 寸 垂 襖に 花 入 撫へて 百 七 の 芳 話も 成る

叫ぶとも 一 周 の 日 あり ぬ 鳴 呼 喜 水 瓶 去て 秋 意

名 神 跡 せり 乃と

墓を 抱き ころり や 風乃 角 力 乎 弔原路道叟一周 墓在土堤道也

墓 尔 所 ぬ 木 の 実 を 好 乃 玄 正 半 之 以 由林叟 一周

木 枯 や け ぬ あり あり 乃 學 の 新 悼堀越 秀呂

文 錢 乃 世々 新 少 尚 や 塔 侍 養 大山氏高祖 父君百年忌



飾くのみをさひーや桃乃二七日

巳巳悼 或人妻

一蓮坊支荷遠てや雪佛

去年會津金井澤砂常 妻共没今傳聞而悼之

名の東岳をありし因字に束河

哀巢居 栖雀豊

減もの冬世也灌佛の後前

悼豆

文月坊初筆やわわー人乃果

悼程祥子以 有善書之名

蕉翁那翁乃塚たてゝわーもやとせ余の雅淡とな

此雙も亦名の三世及ふ凡流を憐れん

餘花ありし其洒坊長り沁追双

悼白翁 千梅豊

### 人事門二

### 勤學

蒼蠅やまの苦みし不審紙

神武紀をてゝせと傳保乃河巻

書入よ猫乃異名を町也秋

眉隠子玩多識編恐 餓鼠之傷之故云余

### 抄書

春宵一刻の貴き値ハ月むのホニよりて一寸陰を惜て 抄書を著る者の光を云ひまゝ清油ハ心包ちる傍に

蚊屋町の一李千金うけしもの

### 書畫

繩結ふむろを絵なりいと搦

言象 形字

鬚かゝぬ奴僕ら子秋燕の尾

言隸 字

檣尔上下の点や水乃月

言上 下字

来形やけきそひなうすくか文字

言一 文字







菜乃霜や岸を足舐り登り舟東岸

亦あれを新酒をやし酒渡島有

手終こし新東あらしめや雲丸金山海

袖志知新旌燈も柔の山路終南

桃ると一媚より迷ぬ隠き里桃源 漁即放舟迷遠 近花間忽見驚相向

鐘返天酒減遊久也泊五船橋

美ハ山尔志こくへ春乃名江樓坐 飲

折をこふ書物物ひや花の輿山路負 書

夏山や木の間の水乃腰かきり夏日蒼 葺

山城の海や納涼の搜し物夏日平 遠

絲竹尔舟人きまふ黙 納涼の種樓船鼓 吹

申ふし切や只と誰り五言絶燕飲

まれ人も木立楚溪の夜座漢 亭

四阿乃わこましとたりす江 亭

人物和

は毛の香又初ねふきや雪乃犬神功皇后 三韓責

雪姑を六つあり所ありのむ六歌 仙

花蓆ハ娘の白微蘭菊蘭菊 時

乾鮭の魂あまや秋乃風増賀 聖

冬に探あまぬ猿なりい堀 伊勢詠 波江哥

平夕川行 百三集卷二 人事二四七 平少齋



心うらみあはれ葉のあはれおきとて意のまろんてさよ  
かき作匠坊れたをいけりこり

虫干や舎那とさうりあふれり又牛若丸觀  
艶昏図

漢如へ其文句も替り考郭公辨慶勸  
進帳

さききれに肺を喪へ切通朝比奈三  
郎灸三里

柳冬影をいさめぬ中ノヤ

つまろお物よ清みの京鞋掛西行道  
過清水

清いあとも力冬濁り一那夏衣西行登久  
土久清水

むすよさそ柳枝浴家志水西行  
觀柳

其笠の下に担へや柳頭巾西行  
過村

毛物あはれさあひぢあはれさあひぢをひらけさ

たれさあひぢあはれさあひぢあはれさあひぢをひらけさ

祓侍人哉それまろり友郭兼好灯  
下看昏

當世乃おのそりけれよ初饗同言徒然草  
松魚之事

牛も名を角よりあふ牡丹肖柏  
騎牛

沢あいのまぬをる花山崎宗鑑  
采杜若

酒もも子を石侍とも花の寸樽次○序  
出文章篇

明らめて女房志つまる乃尺式衣川累女賛  
出文章篇

人物漢

貪發奴水伯夷  
叔齊をありてや茹薇



うきうきめ人もきく誓の山上同

大魚をほきりや谷の秋もく太公望 釣渭

をつ鮒にをや石出さうや顔淵 陋巷 釣場同

又ぬりね怒る樂まや冬も伯牙 破琴

山水乃想ひもきりや月の斧武蘓

雨茂日書たのき忍の愛はく關羽

嫂の為まを侍るや閑秋月東方朔 漢書本傳 割之不多又何廉

談諧冬元鹽辛し十二月養由 基

白る尔を井の矢乃松みり孟宗 義

筍や竹へも志まき雪の義孟宗 義

かひり少利味ハ辛し秋連草孔明 五月渡 瀘深入不毛

秋を控念点乃芳の阿ら關羽 孔明

心尔慙引二つところ明合 關羽

竹乃板の隠倚、時や酒以味晉七 賢

栗入よ既巾に酒を瀦ぬ日陶淵 明

阿ら赤日を羨理ハ存くや雪の友王子 猷

螢しく花子よむ秋ハ蝶の舞車胤

勞ふくをみふ文字ならん李白 見

朝川を時なり月の之益山朝衡 別 王摩詰

まう竹や鞭又及をぬう東坡



筭乃まひうらと伎藝童かな同○雪堂図

○麗人

花なれや寵又あまりて琵琶の塵王昭君對鏡

を向より吹成葉名の宿通香音轉反魂

琴結者よはまを酒をきく志く卓文君序出

文章篇

仙道

腰付乃狗よひうねり花の山張果

系智の鯉を流しや流乃喜高琴

のりちり次鯉を子持たう忘同上

笑をゆるみ息ふくや五月雨鉄柄

寐時々筆掛又拵よひきかへ蛭墓

長生のかき引も志る杖吹鉄

初汐に金鳴わう流や太刀乃中上利

釋門

米櫃を樂屋にりてや花の香羅漢

我嚏透し出しけり秋乃香同上

誰々見ん勢の芭乃波達磨上舟

鞍に向て志休あり沙堤同乘

功德ちり出来て灯さぬ雪燈籠同以指李吻為鬼面戲兒



初見乃菩提氏と對して一句を投す去てりやと  
あつた我の功徳なりとおもふはまや今再其の  
白帛又朱墨其跡をととす

一向尔冷めは壁や水乃面再西賛背  
面達磨

暗かりの指さ〜いろの冬こそ〜一指  
頭

物あをを第たむけそあり〜逆得拾

覺法物二つ鶯子三田常林寺藏寒山  
拾得大幅雪舟所画

唐子唐女外域

粥乃唐子誘ふや雪まる也唐子  
雪轉

從軍於留与尔いとむ桃やとんか取同捕  
蜻蛉

樓や柳尔輕乃細作唐女  
携鯉

短衣にきくも核籠る雞の声朝鮮  
人

中をもつらぬ國あり交衣半臂  
國

聖の鶴於從て群々其法をみぬき小人  
國

足長乃淺みよすむや初かつを長脚  
國

水飴や音楽きこへあけの喜異國人  
吹簞

麻呂山の納涼又習へ日本流異國人衣圓  
合羽列行

異形

四足の神々のらほやち乾柳鞆

もろ〜れ惡魔除ま〜同  
上

平沙天行 平形集卷七 人事二五二二 平沙天



謡りけぬを踏む水すま

鐘

下枝もちこも九門の終り

影之鬼

思ふわらふ夫あとのめ勢追儼

同今美  
女抜髭

白雨せむすふ乃神も柳陰

雷神

木枯を吹せ新神や九裸

風神

牡子足よ天女乃内侍健あらし

己神の序  
出文章篇

福神

夢想神像  
一句附

惠比須

鯛濡て呉服いれり忍びを講  
車も鯛片む表也淡屋

三男も神も持やと一の言

西宮  
図

大黒

大低き松も既中や初子廿日

大黒に玉あけくへんをつひさ日

仕とるも小槌を廢へ夜産敷

初秋の子け白や神乃去俵入

香料新新滴又ひく多小槌加那

小槌加ら黄ひ物あや冬きわ

二階へも如在るあらし福ハ内

二体  
重圖

棟上の時ぬるか小宝寶

宝像  
宝着



小槌うら 餌も女ぬら 人搦調大黒夷合

辨財天毘沙門二天共無贊西者題之句則在釋教門

福祿壽

子ととてを 襖子の丈志 師中へ

月花や笠小く 加ぬ尺と 皺被笠

糸うちも 師中へ 阿らし 不老門騎馬

飼物も 糸玉は 入り 百童

壽老人

南極老人并這箇團扇疑在寵愛慶豈無班女之恨乎然原

壽域之器雖破猶能永年

月あらしも 火桶に やされ 古團扇團扇代 壽老

小牡鹿の 姑まがかりぬ 後乃 祢騎龜

繩の背に 荷をわけりや 玄母騎龜

唐牽や 糸とまき 尋の 立すらし

布袋

字久以 壽の 事小訓きり 子守の 那

正月の 園う 嵩阿そ 小壽也

瓜古巾 妻あも 母巾 夜着包倚囊

梅搦り 笑へ 布袋張 市歩行歩

浅起 漱と ちりふ 子あ 喜袋歩 川



子牛等不為守を新けく重也哉 騎牛 圖

子家を為るぬく地よ牛好舌 同上

公鳥や白川童乃友より毛 見雨後 月 圖

月より教や門松色の多切々舟 見月 圖

舟乃乙子を招き納涼哉 乘舟 圖

あゝ魚乃乳種入をや経袋 舟上浸 囊 圖

月よりや猿小満も子も遊乃下 飛泉上墮 團扇 圖

川に浮鞠を笑ひや夕す 蹴揚鞠 杏 圖

暑蕪乃魚や舟の操 入紙燃於 鼻孔 圖

蓋室の唐子ひまなり突舟 點茶 圖

釣休む友共む丹乃三日の糸 布袋惠比 須谷 圖

隈もなし横目元々葱方船 大黒鍾馗 乘舟合 圖

家士近き稲の孕々や閑耶姫 夢想 淺間 神今遊小兒

人品

壽尔は多あのみ花乃宴 侍 宴

紅葉又や付乃る於燒雀 焚紅 葉

古舟や汐干の海乃玉下地 土蔵 新打

昼の枚又遠れり 也 樽 榊 系 榎 負

わせの香や酒乃開起 小 偽 餅 春 餅 春

ホキまを花や一味塩糍 春味



うねぬ日毛撥子なれを若くハきふ植木  
 茶咲や息又世をふ系あやあん吹石誠  
 改めく草鞋おろさん意の雪造草  
 風中却さる片なくや鞆乃泊紙鳶  
 迷ひ子此阿漕り浦や芦の錐童児  
 春風に踊の師なま麻呂松鹿島  
 託宣又少くまてかさす扇三句  
 大根の腐休を託乃曇さお獅子舞  
 獅子舞も子戯定むや三の朝三句  
 高きまひる後御よるよりをふく流

花み教や獅子を奪んで肩車  
 お宿々きくへそ毛鳴嘘高野  
 宿又おく草薙笛と月尺草薙  
 これおとく心あて阿り加屋四句  
 涼む鞆や艸薙笛おちらひ  
 笛にくも秋の七種吹新く飲  
 露多し谷乃爪木結武樵夫  
 以のしお波越あらしぬ月鞆後  
 綱打小風のかちりや二日碎漁父  
 とせ若乃著てゆら勢様示釣



人あらしぬ男えらしい花一首採女

指ふくか東風有男松とあれ安同突

すむね子や霧一きち為陸帯同上

黛乃二日名もつた松不乃丹三平二 満五句

心や男飛と越にあそ小猫又はへ同繫

徳あれと離る母まさ侍女くし

白粉片他人の汗とありに計里

顔の板にふれあさす舞うしる指

折めら乃結納男や妻の髪賤女 眷妾

とく名又ぬ城きすら武波か朝妻 妓女

け先の勢もいとし折小利酒遊女 移歩

似煉を弦器もて披き雪見式同模 胎君

妾風又一針ぬきや取巾巻勸進比 丘尼

臺にいしぬうちよ菜種の花乃顔美少 年

あらしぬ男えらしい花一首採女

酒のまぬまを肴先月乃舟舟中一夫横陳 一婦標危見月

空若離や泣乃水あそむれ雲

あみし向くる乃思ひやあ成猿猿末 波思

竿先の皿を雀乃鏡か邪廻

玉まつり門不ちるし月乞食式乞丐 二句



冬蒼也乞食の床乃二重夢

妖怪

秋々枯苑やけもの、舞囃子怪百

涼人小う一乃尺をくわはら鼓

蒼鷺を退治なりてや市茶の會見越入道

夫人の骸を地水火風を以て造化一そ乃

あ高し城治して魂といつふちりそ乃

万物の日備ふれはるるハ三界を

出奔はるとつひふ百年の百をまゝ守

多々紅顔翠黛新う歌もききもてハ

一骨の白骨とたねも生前をあら〜

骸骨乃執着なり〜

深草也土人形ハ秋秋美女對 白骨

廻向〜願以此功德鬼外鬼道心。序 在文章篇

滔虫も化あ〜を控〜喜日我百鬼夜 行圖

器財

空揚ハ江鴻ちり、牙白ひりれ漁家 春盤

猩々孤舟をた〜葉をむ〜らせと瓶酒

親猿の上居ぬ時り初幟吹流

磔まてりりふおらあ〜梅花矢弓



万草小虫の吸や笛乃露艸菊 笛  
 玉すわ乃るをやに落は木は実哉玉  
 可記珠を縁にばく免や衣同 上  
 珠やうむ樹も齒朶の片而寶珠 貫衆

氣形

竹田まきわらうて響の位哉五位  
 かうれ位ま響ちうし雪女雪 与  
 鳥森ぬ月軟を響のうたう鳥 与  
 月影や基筭に片たくとまり鳥同 上  
 白むおむちく亭あしよりすく地雀

かくろく此狗をさるや あ記乃月鳥  
 一寐入益を海まや毛見枝核枯樹 鳥  
 鶴をふ川人やわら系乃かろ 雀  
 山鵲や名あや黒丹の暑か須山 鵲  
 花の多蛇も巻はぬ錦哉錦 雞  
 一件かの白唄や月此鳥雁 与  
 獅子の子を乃よ響乃谷ま獅子 虎  
 ましちや響猫お似くよ筆始馬 駒  
 水乃に習ふや馬乃川わら利馬 駒  
 名駒の於此者あしぬ隻野集駒



身と心や猿よりと乃柳の艶鼠

鼠鴉種旭乃幟立鼠

葛又ほく玉をくく多如蕨鼠与

踏ほくり書き襦袢や龜の甲蓬萊龜の序 出文章篇

面々のそを以く巻亀乃山同

豆蟹結襪をちくへや大袂蟹上

生植

滄梅尔片れりふりこ梅与

二通で心尔兼く梅柳同

照降もいとたぬころや梅柳同

梅の香に筆ゆを寝なす檀芝瑞梅与

ひ月のち手抱きて竹乃眠り鼓子花 与竹

生植與氣形

やどろせて其多石多桐鳳凰の序 出文章篇

千色の青知り若や竹乃春雀 竹与

梅を足て人まの休む音呼梅与 音呼

年たろて捕る名けろ郭公 樟与 子規

榛乃木孤る出とり配れ居の文字雁

な寸業も親の気尔いき牡丹与 御子

鞍おくとそ他村又告よ山櫻与 馬







車をそまかく家のわつんかぶ牡丹

襍題

延寿菴常仙叟自西贊又細小詠よくとときこれ梅  
妙をれとあはすし將しき

流如く廣聖わきまき梅尺の奈

射の引第塚や若紫陰 歌中啓有毛泉  
古松牡丹等

加の外お七種らめ 組 や野辺の秋 初秋  
野

七光に活ふ草木や十二月 菜局・以上二句十二月  
圖之内也全圖贈井花子

有人拾這箇一物喫了無香寫得有味再生真蕪菁

年の内又殊かきそむれ妙奴死哉 潜狩野典保  
子蕪菜苗

陽炎ふ蕪鉄乃わのまちくれ々わ 再生蘇  
鉄図

まき蕪葛妻にゆりやや豆のむ 西題  
闕

鹿のきに秋を感じし月乃光に郷をおもつさまほつわゆ

船のたそふまき三詠一圖奇ありといふへ今神詠乃詞を

あけく二首の趣趣かり用ひき

奥山をよむのそ月のみや二人 人丸猿丸仲丸  
三詠合併圖

えむ時又井目乃遊及石榴哉 二仙在石  
榴狂西

宮川長春の絹又忍びあり精神入て紙又まきり又一体乃

き尾とゆる美貌かよふ失ぬれと骨肉はあふ不在といふ

一かゝる彩をまきりひり冬紅葉



一俵乃早縮之のうはく嵐哉継子  
 智直亦是を担ひやま穆奴牡丹哉如意与牡丹  
 出来秋乃香ゆのうはく瓜を伝水指頭画

一藥罐乃茶忽も空し

水瓶も車付もや不遊言毎理像自己

人事門三

送別

行徳乃邪湯や以以こ子規漱石翁還東 総銚子浦  
 めはくも一也出也寸款も冬至梅同再  
 身息二日舟旅也咏教同

歩羽して送不船路そ都公高橋湖雁 還肥州

四條も亭藝ハ目うち夕涼医生酒 岳歸京

三つてハ畑を忘伝おほの月鈴木琴佐 還越州

本陣もききうめすも并冬礎太田見童子還水 府日到千住作

花の伝言砂かけて夫婦傳れ鈴木羊 素之京

歌久更吉田あゝりの宿也雛浮山外祇 丞之京

文字摺へあゝ来ぬ雁の迎也同之 奥州

常也其巢の中お京乃連雀見砂 明之京

いく衆寐ても侍や都の笹粽玄香 之京

湯廻りもやさいも以菊の咲時分平沾郎 之热海



ち、初、冬、鬱て居、る、れ、き、志、あ、れ、布山之信州

宿割や月夜の以を如、民砂市石之浪

幾日経る子福の紫城、花序出文章篇

續く荷乃臺よ去庵や冬の不二、小山四子之越

柄袋京よつを侍、竹田十前

いなつは乃と、化羊

右自享保丙辰至寛保、崔見砂明

三年癸亥、之浪花

洗柳又教あまねん、中村竜釣

孝のの筍搜せ八ち、之因州

鞞のと総へむくや花乃駒、或人之

成畑よ旅に、題隠蓑送高

すみより、水府低

涼めとく、哉之京

旅なきを、鳥風

よ幾宿を、寄圭

雲あ、寄木

とあゆ、南佐之

塾を錦伊、和州

旅な、鷹野笠庵之

夜山や温、越州新蒺田

足、江寄砂

足、送佐野砂

足、浦之作州

足、芦船之

足、相州

足、人事三六一

足、三少



二とあり東の菊の籬う常州之

やれ寄午の籠寄午を寄午

所子と舟人引留む江戸羽白

鎗持南島之ま下地常州してい南島之ち常州栗の穂

京乃冬馬髪山の菊兵丙を之京

山崎の献熊文之立信州き信州け信州よ信州舟乃秋信州

芦竹種寄善徳寺や乃木和尚あ乃木和尚て乃木和尚禪師の乃木和尚

家お母寄望も寄望振寄望落寄望七寄望作寄望の寄望妻寄望々寄望支寄望

不考其樹之近駿府く駿府ふ駿府絶駿府の駿府福駿府な駿府あ駿府け駿府手駿府葉駿府

待駿府信駿府系駿府淺駿府岡駿府托駿府ろ駿府々駿府心駿府太駿府闕駿府

棟一川目同列同て同以同持同く同女同み同地同桑同

泣連張同て同搖同々同川目同又同や同伊勢同振同

女郎花同か同ほ同の同依同耐同り同水同銀同鑪同

加同せ同以同て同糸同續同いて同立同や同蠅同拂同

右自延享元年甲子迨寶曆五年乙亥

惠比次来揚講之京と之京て之京も之京魚之京り之京旅之京日之京

樹義童之の義童之末義童之乃義童之稻義童之家義童之ふ義童之や義童之馬義童之の上義童之

船笈浩還阿州に笈浩還阿州君笈浩還阿州ん笈浩還阿州小笈浩還阿州碇笈浩還阿州し笈浩還阿州

羽寄流旁寄流や寄流振寄流乃寄流志寄流を寄流め寄流ハ寄流楓寄流の寄流声寄流

京入庄野搏の庄野搏夜庄野搏を庄野搏も庄野搏て庄野搏も庄野搏守庄野搏也庄野搏白庄野搏け庄野搏々庄野搏し庄野搏



伊勢肉て乃宿又茂みや家の紋勢州勢州

奥中とそ新香を持毒の弱葉哉春堂之奥州

解て又かく新枝あを夏柳柳枝軒文思帰京

初旅や目をしれきけを花に鳥戊寅年旭亭平沙之勢州

きくく乃その右やあそそ新小夜石孫都之房州

多々あそそ壇るる日や幾や方榎本晋臯之浪花

又々新酒をを契れ江戸の友蘭阜還濃州岐阜。酒言其家

産新製酒名  
三千土勢者

宿々新寂を又けけと竹乃春題

あつ々ぬ松窓乃露や温水友達範路之相相州

魁の荷を又かかろや梅乃宿室砂常還會津

又章の窓や待らむ美葉時有李堂桃溪還勢州久居

筆葉をとり侍日や旅乃清石巾佐藤砂良還肥隈本

涼むわを弦具れ々々也旅日記沾國之二荒山

厚くわのあ右やあれ富士の旁寄僧

立を旁ゆけを那燈の舟取系暉牛之勢州

秋餅の新場をされ地旅乃酒砂良再還肥州

一秋片々様乃屋札や月の友東里之濃州

講中とそめめめあし伊勢の屯寄不那木氏

國毎乃花や烟草の和泉まで暉牛之泉南



旅先にかと幸せうらし菊亭戊子秋月之 遠州中泉

行記

詣神路山

此行、元文二年丁巳同門初老超波露庵有佐々敷記ありて予とへさちひ客中三吟の句々綴ゆに詞とありて友批釈といふ一集になさんとする伊せまあつて京師にいつりいまだ日あらずに江戸より初老許へ寄るふなうぬるめひひあるによりて露庵をてに日て馬をたせて立ちくぬるありあれを予にへつてくられてかの佐木を所あり他ら自なりぬ

吹降又嘴をそむくや維子姑詳崎

言沙乃东风よを埋む小松式大磯

蝶まよやき後ここの原もけあきりわ同

鳴立一夕あらねとさすに懐古の仗談かす濁

初々沃あゝ親を失ひし開基三平風二世厭求こそ  
朱入等法師を碑面に空し記名の跡を  
ろろあ飛つて我愛ゆもほ又経き人あり  
とや草庵あらたに尺也終先のまこと悟まるれ

夢のあととメぬる言沙乃春

おさふ氣乃爽や出あを肩車酒川

出雲冬とこの嶺持峰乃月箱根

山中や霞を汲らあれ事同言 有體

鶯にとまりをつり宿をたれ蒲原

亥の日を川流照るや炉乃まるとお藤枝



海棠や煙よそれと可睡齋早蕨掛川 行々間

白管乃升あやや濡きおなくかまの白須賀 枕上吟

光あきよりてきて茶の吉内衆吉田

案内は連一男の又休めとくをへし和名

山の名にきとえてわつらちうらりた歌

わすれ霜良香散のねふ流し

長崎やいせ路尺そむる三月菜佐谷 舟中

春満ぬ利益衆生の舞春際一身田中堂前かいて嵐 扇之うき居をみる

子枝乃松や雀一川の隈もか外宮

似合し起垂や木の洞乃神流山内宮遥 拜所

藤阿りや枕籠造り老々田村川の急水枕籠 宿つらるをえて

ゆく春又らくけぬ御やよこ横田 川

逢き日や野あらしを墓の苔多栗津芭 蕉翁家

四月一日小原にあそぶかかの室あまのこころ平

給あたるやといつらぬみかきりたれを

小原め乃返守又わろくぬ給のれ

修覚寺八景とて古き歌詠あれも田夫野翁乃

それこそとありて教ゆへくもあるぬをを詠ゆ引

何そむうけさまにむひきぬさるる中そい

遠岫帰樵といつものよやんころよもあまのに



遠くらし

帆にかき舟樵や遠の卯月山日枝山麓

麦川のまゝくも鴨乃なり礼う下鴨

白砂や清あれにちり朝曇上賀茂

かき祭すきてゆりき松魚三條旅宿

為にふきん玉巻めら舟葛の文百万遍

八角に天地さき志け吉田

白罌粟やちりくちり墓第黒谷熊谷墓

くふよむ教を去乃ゆり同所敦盛墓

下向をを尺さるゝたまへる紫陰永觀堂又号聖教來迎山

実様やせさくし通不嵯我の端

京乃宿翼の新茶見て立ん

遊相州同年五月廿一日發題辭。大山乃岩根より

を狂人し板島の海面小目とあそび

めむいふくすた様なわもと

さ川舟末の一日ちり茶葉の小冊やとろまじんとす

他日再訪のた

まゝとらさすマ

見添まきくれ青田に足かひ鈴森

茶笥草葉、胡床より秋をり生麥村野店

木枕の香もいむろし夜乃者宿 藤澤

あゝゆる考戯を青森の奥を傳されきり

雨澄まの許ま小まうにとりを増てうらひ連ふハ又



一郷の変風きんまにあわらし

蒔袿乃響くしなひり茨のちち一宮

汗入て日除を潜敷山路のれ山大

源々甲斐の猿橋をて馬入り入

夏川や名も中より此猿とる川田村

大日探りあてり三月閑窟江島

雨伽沈て願書かきくむ梅雨の涼満福寺辨慶之硯水

夜艸やぬくほくほの地清浄鶴岡八幡宮

短夜城まゝふまたろし瀬戸此月金澤

夏もよし若乃巻はくはら羅梅寺緋名

湾<sup>ワシ</sup>づらぬあまさぬ風や周扇乃絵能見堂心越禅師乙船帰

帆詩前湾啣  
軋数吉槽

西國札所巡禮此行は家母乃に西国布教

の靈示に称名一巻乃札納め  
まのくにいひあふとへもせんすてふとを  
めらにこそ先考の廿三年まらりあれを  
るこれのれおれよかりて光礼すくみま  
を一堂は二枚のれを打くすて六十六枚  
おのひり名ありてのゆりる風流の  
ちれを教もかまはすへと予を遊乃志  
慈母をちまの河み成就して後途に例  
深まもまののいとよき途の力  
にてをへき元文三年戊午三月廿二日

ものつら山の欠目や候はし野  
燕と旭よさを保る檀かつら若宮







馬乃繩六臂小まろくろの籠かごもなす

伊勢道中題征馬三室荒神

笋たけのこや竹たけ乃の於ののの菽あずき子こ和わ治ぢ

人ひと来きたひもも不ふもも寐ね智ちやや切きんん二に鳥とり鷓せ鴒い

志し摩まよりよりととぬぬけけ糸いと也やよよほほくく炎えん寸すん伊い雜雑

宮川の上柳と云糸に岐あり是より順後の安あま

かろ。又先考の旨にあつたもあまの縁を

笈あ摺ずのの背せらら餘あま花はなちち水みづ淺あ黄わう

紀きとと伊い世せ乃の峰みねららたたちちけけ夏なつ鯨くじら坂さか岨しづ望ぼうの

山やま里りやや飛とびびよよまま次つぎ杜つと鵲せき中ちゆう紀き山さん

川かわ上かみのの拈ねん佛ぶつ煤ばいひひはは新しん糸いと式しき荒あらいにに加か村むら川がわ日ひ

ややきき山さんややいいももああまま夏なつのの眼まなこ又また涙なみだ山さん鬼おに

兄あに弟てい姑こ山さんおおももろろ也や若わか楓かへ曾そ根ね太た郎らう

ままままいいをを飛と蟻あひ又また問と人ひと熊くま野の路ぢ本ほん

宮みや敷しき多た多たとと芍しやく菜さい又またたたののままよよれれ新しん宮みや

流ながるる汗あせ補おぎな陀た落おるる山さん麓ふもとああもも那な智ち山さんのの四し月げつ十じゅう一いち日にち

陰かげ神かみももとと空そらのの病びやう系けい温おん泉すい乃の烟えん本ほん宮みや

葛くわ又また玉たま雨あめハハききるる業わざ乃の成なり古こ此こゝ夜よ宿しゆく於お寺てら前まへ之の

御ご祭まつり乃の沙さののたたへへややわわ々々浦うら遊あそ弱じやく浦うら賦ふ出い文ぶん章ぢゆう篇ぺん

和わ歌か山さんよりより粟あは島しま又また宿しゆく人ひとをを水みづ乃の渡わた舟ふね又また

ののああままよりより来きたりり何なにきき人ひとのの急いそぎぎててららちち倒たおすす



たりしの手きたのよみ指をアツクあゆ人々  
つもりかこみくなふありふ

疵いやき蒲乃種ハない糸神の魂北島

恙拵ふれ花供のむや秘菴兒廿一日高野山花供

位の江やきし末社又杜あ万葉七譬喻歌云墨吉之淺澤小野之垣津幡

衣介摺着將衣日不知毛

恙棄あり 畦のよき屋格子窓高津官

曼陀羅の化佛やいく川枝蛙當麻寺

蜘蛛乃子や藝の綱をひる先ぶて安部文殊堂

わすらわ梅わ寸や聖乃むり繩奈良

笠取て尋ひよ椎の夏木立笠取村邊有幻住菴之跡○江州岩間寺之後

又月五品もに指競馬る人のわきまふのかとろく

ちとみりかちきさぬまらるんしとる向と

くあのみりまあれを兼好法持りゆる処も

非るの為よさまたけなりしと

樹又眠法師と如くくくる馬

鶯の音に揺るとめ雲なき野野宮

あふうやふ連の夏ます節丹波国穴太寺廿一番札所

くふちりり碎て志まる糸八幡竹八幡山○此日當竹醉日

諸山の烟嶂と分を流乃湿気より向みり



箕尾より池田やすら婦

萱艸や酒乃ひひに聖すむ街

鐘又今蟬のさけ声サレ乃口播州高砂 尾上鐘

とちあしけさや窓の鈴乃流法華寺法道 仙人之窟

鴨の子やまゝ橋立内おそひ丹後 宮津

湖中竹生鳩より長命さにならん尋ふも可

比叡たろし吹落て湖西の小碓流れたよみ寂艘

の人一家にやうりてよも寸も枕よ波の音をす

き波もま苗やあらし舟津島

美濃谷汲山華嚴寺三十三番札所御詠哥云今ま

脱け蟬笈摺代をおさ然なり  
遊眺  
お祝とみたりかひつる城と記そむきむらの谷汲

遊眺

郊行享保廿年乙卯仲秋中七日亀戸延命寺行て竟日 一言仙角力に弦ひ秋よあてまま和当の閑みよやとり

及橋又立て鴉もや松の月

ととひまゝ巫女の首床やむしけ家

あり片筒おき寸や比森櫛の落十八日詣 吾妻社祠

中川乃風志をハゆし中箱葉

出来秋や大根の中代をや平井聖平井聖 天宮

ひらおのりあふくねを芦の波ふく魚あり







同 元文四年己未卯月望の日本國秋風二子よ、いなち  
ちれて赤石野山又湯井の原より

あゝ怪しく祈りぬの込るは多六根 練馬

夏草や野い色色あり乃たりの山 東高野山

蓮の蕊をれを足これ成鼻にきく 三寶寺池

しりけなく群れ盡やちられを 赤石神邑路傍

むすもひ堂拜め志水のわき所 井頭池 天女宮

江行 江行 日一りうは極ついでちかつこの舟堀はゆきまきく  
六味、閑居をとちんとすりぬのり

おく漕人の牽をいこちれ舟の霜小名 木川

あゝきぬ夢通れ乙子の餅乃錢 中

花も実も花又納め冬田哉 舟堀冠子 亭夜宴

春望 延享三年乙丑弥生中曾岩代街の庵にて二子  
布施指とてよかせにさるりれ

病又問へ流れつ川こと葛西海苔 葛西宿

姿奈礼也奈美も松戸舟 松戸宿

遠く見舟帆や苗代のみとわ川 太井

度咲多伊都礼能花毛一度咲乃介 ねをすて

忽前車の誠をわりの馬上又あれをあり

笑や棲式夜々眠らし鞍の上

藕 のろハ 遊ちぬ糸やまか袷ち 原金

花むふと名のあはぬま乃鏡 手賀沼長三里如湖水



出現の蛇うごめりての被<sub>布</sub>お社<sub>前</sub>

冬望審曆十二年壬午十月三日  
觀大塚占春園之菊圃

旅立乃非也るあらし武園の菊

徳林を遠き舞雩に遊<sub>遊</sub>おも

集め覺て小松はあらし梅<sub>梅</sub>稱<sub>寄</sub>秀<sub>論</sub>木<sub>語</sub>列<sub>集</sub>見<sub>覽</sub>

表のよりけな<sub>あらし</sub>に裏の浴風齋<sub>冷</sub>也

小判<sub>箱</sub>目のそのささ<sub>い</sub>る仙境<sub>の</sub>お場<sub>ま</sub>や

あやかん

おもし<sub>ろ</sub>け御系<sub>屋</sub>乃金<sub>丸</sub>木の紫<sub>う</sub>れ

游賞

享保十五年庚戌亥大衆の夜<sub>ひ</sub>を<sub>り</sub>て膏<sub>澤</sub>乃

あまあねきを<sub>感</sub>寸

芦牙に象も肥<sub>ふ</sub>や<sub>春</sub>の水

百盃の飽<sub>と</sub>わ<sub>る</sub>や<sub>月</sub>酒<sub>行</sub>江

三日月乃片<sub>輪</sub>車<sub>や</sub>綱<sub>の外</sub>

神<sub>あ</sub>く<sub>尔</sub>脚<sub>の</sub>利<sub>を</sub>天<sub>よ</sub>市<sub>は</sub>お<sub>町</sub>酒<sub>之</sub>

嗜飲

勝鶏の卵<sub>め</sub>寸<sub>なり</sub>月<sub>夜</sub>宴

酌<sub>ち</sub>ち<sub>た</sub>ぬ<sub>や</sub>菓<sub>の</sub>酒<sub>む</sub>り

納<sub>う</sub>ちに<sub>風</sub>の<sub>く</sub>わ<sub>り</sub>や<sub>二</sub>日<sub>酔</sub>



物メテ充をや一あへたまこ酒名酒帳奥書

茗談

些とをりり隅にかけ声十三夜賞茶話之劇場 是謂知也婆武  
るあへを入梅めく邪や袖ひき茶

人事門四

麗情

ぬるぬるあわう川木垣犬々々里  
足なくも遊め乃あういわ花のみち  
人もあは定めぬ秋も葛のうら  
恋と世に蘇奈みしておく恋

妾かへけふ人につま守

極難日尔初系故目見へ能合歡の花

泣文此妾や以川こかえれぬ不見不 聞恋

物いもぬそれを教又見不極哉柳巷始栽櫻貳巫 山所需○丙乃年

挑燈乃乃あひの百や冬月

出来秋や富又あまりて破枕驛 舎

巫女乃難目に泣きなう御稜寄神 挑

乃妾の眼をたてよ及寄向帳挑 燈之圖

古恋るうしろは紫なり加きつ寄 草

水刷毛に煤や帯と心梨乃ち洗美人 之圖



述懷

我ときくわの謔言や秋乃色癸丑年秋病中吟  
二句記出文章篇  
 迎火にちひゆるまきくのま向哉  
 菽ときく老ふ二つ乃病のふ甲子年春病中吟  
二句記出文章篇  
 病教ぬふまらるるぢりすと又衣

内疎く姦し外親しくかひりあか於て  
 齊ら守脩死此親疎の同心哉さか地を  
 きく詞林は遊んで脂の如く華れどくならん  
 のく享保二十年乙卯五月十日稻街の家をすく  
 醫業の名を亡き自諸本と呼志衆山不在

破レ

嬉レ

皋

月

雲

乙卯秋東西漂泊のる近郊は田家よをりて霊  
 なるおそれとらるる中おも不意の發ふあくる中  
 もいある因縁をわあむと抱くちりき一長たり  
 有りあつ河れと三東万葉の為ふりさすてても  
 上客たる人

靈棚や我もかり寐乃枕もと

あに無用の遊窟つねに三十のとりれてひとり  
 心のをれあまのむらも境をあらはれいへ毎  
 人のいさめれかこつめかや驚詔の一散ふ漸く



字て勅多る二とくちむ

是の瀬糸み登ちり年此酒勾川 元文元年 丙辰作

十又度記る名作れぬ秋半秋 元文五年 庚申患痢

白萩の餅にかとありさ那寺 病後 得禱

こもく小盆ハ紙くあり岩蓮花 快全〇右三句 於故柳巷作

病を傷れ寸おそく郭公 寛保三年癸亥四月病在 陰股取作枕記出文章篇

焼壁のまをれ子紙並むも紫のまをれまをれ

家くもくけけ離の竈也 延享三年丙刀三月 岩代街州舎罹災

條血ハ茶とこめ等菊乃綿 寛延二年己巳 九日患瘡癩

眼と患へに社中渡邊氏がて掃眼石と障らほれ

月ひく漸痊ぬけひ言は清光とくくわ乃

丹乃く赤たまふこを愈さを七 寛延四年辛 未病眼二句

嘆曰双眼兔毛の為ら傷られ寸身紙魚とちる小

かとり半と

名月や又てよりあは居ちくくく同

とを心し盲搜しやあを此餅 寶曆二年壬 申病眼四句

夜を凌ぎ目痛の澁やかとくき寸 四月六 日

まをゆきに急せを涼しき郎巾也

眼病十戒と二媼二酒とくく柳けかともあもんと

こまかとりさハ尺わくまあつ化あやめ



とちく 不問 せけ二毛乃秋を耳生 答書

籠一ツ 殖さぬ氣なり事始 宝曆六年丙子正月十八日 早晨急火の爲る又居と失ふ

されとも文房の調度書送枕表 芳さいたいにするいふや

桐釣てまゝと皿れあゝ 恙怒ひ寸 二句在和泉 街上假居作

茂みをもかゝてきめとやあく 垣明和四 年丁亥

四月九日西岸之州舎罹災同月晦日移神田永富 街取戸内虫蚓長鳴而慰我愁情於是名歌文菴

明和三年戊子十月欲闕會集之席牌而言志

荷をとくとおもへも 樂一落柴搔

かゝれて雲をれとみく 透おちをの那

下元の日水官解厄と物隠極の志を起して彼

絶文致語其巾乃異がらをききけて此餘の正

なるに喩らわとせきりて是非の境をともふ

あゝとつゝあゝは月の文を花は山鏡に引

つと秋てけ垣の内又あゝんのゝあ友の主祿

百司けよりあゝとてあゝ一而一念の樂よ住す

かの會もあゝとよきおかくにこそ

灘過涼こゝ風の風や御取哉

懐舊

濡きぬやと、乃々目ももき柴乃々 過素堂 舊迹

隱家の魂と花子や鏡乃 茂睡碑。甲子二月 七日於金亀山作



打杖の教よりきく予の心 言或人之父之遺書

竹にいてき親いま寸扇く 言育方堂以父之扇

燭閑や子法教ゆのき苦批杖

志教ほも乃古入るゆ出也秋の 七月晒書

やゆ木又むく一城さち一秋乃月

以流く又點茶ハ古し神くき

米高友と賦せし翁を懐ひ野菜を供して忌日弔

月きく米まいつせし 世乃玄孫

蓑急了ゆとちん時雨の猿子橋 戊子年蕉翁忌日懐其舊地作

俳諧而形集卷之七終



大和山四宮寺代の巻

九十才一の巻

應好座 吳依

美



渡部

大  
一